

「自分」という語と概念の検討

——「脱・自分」の社会学的議論のために——

鍵 本 優

要 旨

「self」「personality」「主体」「identity」「自己」「自分」といった諸用語は、類似した意味を含みながらも、それぞれ特徴と限界をもつ。本稿の目的は、「自分」と諸用語を比較検討し、社会学的な「脱・自分」論の対象を分類・整理する認識枠組みを示すことである。

本稿の結論は次のようになる。「自分」の語と概念には近代日本社会特有の複雑さがある。自分が「脱」の対象となるとき、その複雑さはとくに反映される。この考察は社会学に新たな理論的知見をもたらす。自分の再帰性には、内容の多様性以外に、形式の多元性に関わる。今後は、自分の再帰性に関わる多元的な形式にも着眼した社会学的議論が期待される。

キーワード：社会学、再帰性、近代日本、自分、self

1. はじめに

(1) 本稿の問題関心

1つの例から始めよう。写真家の小林紀晴はアジアの各地域をさすらう日本人を「アジア・ジャパニーズ」として紹介した。小林が取材した福岡出身の男子大学生は、システムエンジニアの内定を得た直後にそれを蹴り、日本を飛び出した。彼は香港・タイ・バングラディシュ・インド・ネパールと旅をする。ネパールのカトマンズで小林と出会った彼は、さらにインドのデリーまで自転車で走って行くつもりだと言う。

それは約六カ月の旅になるはずだ。

「何故、自転車でデリーまで行こうと思ってるの？」

そう尋ねる僕に、すこしだけ考えて彼はきっぱりと言った。

「苦行です。今までの自分を壊したいんだ」

壊したい。強烈な響きだ。(小林, 2004, p.138. 傍線は引用者による, 以下同じ)

「今までの自分を壊したいんだ」は、たまたま出てきた言葉ではない。この大学生は過去に1年間休学してオーストラリアに行っていたが、それは「今まで自分が得てきたものを排除することが、今の自分には必要ってことだった」からだとも言う。自転車でデリーまで走り抜ける

彼は、具体的な何かになろうとしたのではなかった。むしろ「本当にやりたいことは、あの旅が終わってからすべて始まった」と述懐する（同、pp.136-137, p.284）。彼は「自分の中身を徹底的に排除したい」という観念的欲望を自覚している。

例をもう1つ挙げよう。評論家の勢古浩爾は自らの過去を省みて次のように書く。

わたしは俗だった（いまでも、だが）。会社生活は如才なくこなし、友人たちとは破顔して付き合った。見栄も体裁も欲望もあった。しかし他方で、自分をもてあましていた。いまにして思えば天性の「関係（自分）の病」とでもいうべき痼疾だったのだろうが、もう地上にあることが不快でならない、いっそ暗黒の宇宙の一点にまで上昇し、体の内部から爆発して木っ端微塵に四散したい、と妄想したりした。（勢古、2013、p.4）

具体的な行動とはならないが、勢古の言表も「自身に介入している関係とともに、自分を破壊して消滅させたい」という観念的欲望を示している。また先の大学生と同じように、勢古は具体的な何かになろうとしたのでもない。これらの欲望には、たんなる自己否定や自己批判といった一時の理性的営為を超えた、ある種の強烈な徹底性がある。哲学者の鷺田清一の言葉を借りつつ述べるなら、これらは「存在がめくれること」を求めるような、自身を捕らえている「規範的な秩序を解除して、じぶんの存在を一度ゼロに還元してみたいという欲望」（鷺田、1996、p.58, p.77）ともいえよう。それは端的に「脱・自分」の欲望と呼びうる。

「脱・自分」を広く一般的に捉えたと、「個人的主体が自分自身を突き放すかのように対象化して、それを観念的に破壊・消去・無化・無意味化・空虚化・無価値化していこうとする」ことである（鍵本、2017、p.18）。一見すると、大学生の例だけなら宗教的な修行としても解釈できそうだ。だが勢古の言表や、現代の若者層を中心に広がる「死にたいより消えたい」といったネット上の文言までが宗教的な修行とはいえまい（山本、2006）。また別種の具体的事例も数多くあるだろう。

本稿の問題関心は、幅広いそれら種々の具体的諸事例を見据えて、「脱・自分」という包括的な観点からどのような社会学的議論を展開できるかということにある。

従来の社会学では「脱・自分」がほとんど論じられていない¹⁾。その最大の要因は、再帰的自己論を含め、自己やアイデンティティをめぐる社会学的議論の多くが「自己の（再）構成や安定的維持を欲する」という人間像を暗黙の前提にしてきたためである（鍵本、2015）。たとえば、自身の主体性・人格性を放棄して匿名性に埋没することを論じた山口節郎も、それが大衆（mass）の一員として徹底的な同一化をおこなうことで達成されるとみた（山口、1982、pp.65-66）。この捉えかたは社会学でいう「脱個人化 depersonalization」論の一種であり、自身を集団成員として構成的にカテゴリー化していく過程を述べたものだ（片桐、2017、p.14）。

したがって、「脱・自分」の特殊性を明確に保つために論の範囲を限定的に設定する必要がある

る。まず、同一化対象としての具体的・実質的な宛先をもたないものに限定する。もちろん「脱・自分」が転機となって結果的に‘新しい自分’に至り着くことはある。だが‘新しい自分’を目的とする実践であれば従来の議論でも十分に説明がつく。つぎに、対面状況での戦略的表現も外れる。「私の存在なんて何の役にも立ってないからなあ…。」といった自己卑下などは対他の関係性の構築・維持を目的としたものも多いからだ（吉田，2008）。

(2) 本稿の目的・作業・構成

(1)では、「脱・自分」という包括的な観点からの社会学的議論を展望するとともに、幅広い種々の具体的事例が予想されることを確認した。具体的事例が種々にわたるのは、むしろ定義的に「脱・自分」を否定性のもとで広く捉えたからでもある。専門的厳密さを最重要視して積極的に議論対象を囲い込むような立場からは、種々にわたるものを扱うことになる定義などは雑で劣ったものにみえるかもしれない。しかし本稿は否定性のもとで広く一般的に捉える点に意義と可能性を見出しており、むしろそうであるからこそ、包括的で一貫した観点についての理論的議論が必要だと考える。とはいえ具体的事例をただ雑然と並べるだけではそうした議論につながらない。社会学的な「脱・自分」論を展開する場合、種々の具体的事例をどういったパースペクティブのもとに位置づけていくのが有効なのか。

本稿の目的は、社会学的な「脱・自分」論の対象を分類・整理するための認識枠組みを具体的に提示することである。といっても管見によれば、その分類・整理の基準や認識枠組みの原型も従来の社会学的議論から直接的に与えられているわけではない。本稿が手がかりとするのは次の点だ。「脱・自分」には対象語として「自分」が使われているが、実際にも(1)での例のような場合、その多くでなぜか「自分」の語が使われる。本稿ではこの点に着眼し、2つの作業をおこなう。

社会学の用語では「自己」「自我」「self」「personality」「主体」「identity」などがあり、通常「自分」は日常語であるためか使われない。だが従来の諸用語の多くは、それぞれ特有の限界によって本稿の問題関心にじつは適さない。この点を諸用語の概念や使用法、歴史的・社会的経緯などの検討によって具体的に明らかにするのが、1つめの作業だ²⁾。

では「自分」という語なら制約がないかという、むしろそうではない。「自分がない」「あの人は自分というものを持っている」などと言うときの「自分」は、不思議なことに普通は「自分自身」という語に置き換えられない（Hirakouji, 1973, pp.18-19）。また、臨床心理学者の時岡良太は「自分がない」という体験やイメージについての自由記述調査をし、「自分がない」が行動・考えの‘中身’や主体性のなさあるいは‘存在’への疑義以外に、「自分の感情を感じられない」「自分の行動をコントロールできない」といった内的な機能失調状態を示しうることを見出した（時岡，2018, pp.29-30, pp.100-101, p.110）。「自分」の語は‘精神的・心理的に独立した人がもちうる、何らかの中身’を暗に指している。

このように「自分」の語は特定の制約・性質をもつ。そしてそれらは人びとの自分のありかたとも深くつながっているとみられる。(1)のような例の多くで「自分」の語が使われるのは、そのうえでのことなのだろう。本稿の問題関心から「自分」の語や概念をあらためて考えることは、どんな理論的知見を導きうるか。語の概念や使用法、歴史的・社会的経緯などの検討によってそれを示すことが、2つめの作業だ。

本稿では、用語に着眼したこれら2つの作業をつうじて、社会学的な「脱・自分」論の対象を分類・整理するための認識枠組みを具体的に提示してみたい。

本稿の構成は次のようになる。まずは従来の諸用語を批判的に検討し、「脱」の語と self の概念が議論に适当であることを確認する(第2・3節)。つぎに、「自分」の語に着眼する社会学的意義を論じる(第4節)。そして日本語研究の成果に従って「自分」の語用的特徴を確認する(第5節)。それらをふまえて、主として文学上の諸事例に拠りながら、「脱」の対象としての「自分」の語と概念の特徴をその歴史的・社会的経緯をもとに明らかにしていく(第6・7・8節)。最後に、それまでの議論から得られる理論的仮説と認識枠組みを示し、本稿の議論が社会学に寄与する点を述べる(第9節)。

2. 「脱」について

対象の語を検討する前に、「脱」の語が選ばれている理由を述べる。なるほど「破壊」「無化」「解体」の語のほうが事態をより直接的に説明する。だが直接的であるぶんイメージも強くなる。それらをキーワードとすると、どうしても特定の事態にひきずられて広い一般性が得られにくい。くわえて用語としての根本的問題がある。それは従来の学術的文脈があるために、本稿の問題関心にキーワードとしてそれらを適用することが誤解を生みうるという点だ。ごく簡単に示そう。

「破壊」の語は、本稿冒頭の具体例の言表には適合する。しかし一般には物理的ニュアンスが強すぎてイメージが限定されてしまい、考察範囲を特定の現象に狭める可能性がある([Shneidman, 1993 = 2005] など)。いっぽう、社会学ではロバート・K・マートンによる「自己破壊的 self-destroying」信念・予言の用語がすでにある。それは、社会的状況の見通しについての信念・予言によって、逆にその信念・予言の内容そのものが裏切られていくことを指す(Merton, 1957 = 1961, pp.118-120)。

「無化」の語は、すでに宗教学的な議論がある([宮本, 1991] など)。また実存主義哲学での有名な議論もある。ジャン＝ポール・サルトル『存在と無』(1943年)は、とくに何も意識されていない状態の「即自」と意識的な「対自」という存在のありかたを区別し、自己の「無化 néantisation」を論じた。即自存在が自己を意識として根拠づけるとき、それまでの自己のありかたが無化されて自身と距離をおき、対自存在へと転落する(Sartre, 1943 = 2007, I, p.251,

p.257)。つまり自己が意識の対象として現れるのは、むしろ自己の無化をつうじてなのだ。

「解体」の語は社会学で「社会解体」「パーソナリティ解体」が使われてきた。次節の「personality」の項でも述べるが、それらは規範的な社会システムの統合状態を主題とした概念である。すなわち念頭におかれるのはやはり統合や再統合のほうである。また、そうした社会学用語での「解体」は‘壊す’よりも‘壊れる’というニュアンスを運びやすい。そのため自身への再帰的な対象化を扱う本稿の問題意識と少々ずれてしまう。

以上より、具体的な諸事態を説明する語ではあるものの、「破壊」「無化」「解体」を学術的なキーワードとすることは社会的にも誤解を生みうることがわかる。具体的・実質的な宛先をもたない観念的な欲望や実践を幅広く扱ううえで、否定性のもとで特定の意味や方向性を込めない「脱」の語のキーワード的な使用は、おおむね適当だと考えられる³⁾。

3. 従来の諸用語の批判的検討

では、本稿の問題関心からみた「脱」の対象として妥当な概念は何か。「自分」にあたる社会学用語は「自我」「自己」「self」「主体」「identity」である。‘自分を変える’といった意味を考えると「personality」「私」の語も重要だ。本節では諸用語をその概念や歴史的・社会的経緯から簡単に検討し、「脱」の対象を議論するうえではself概念がさしあたって妥当であることを示したい。

(1) 「自我」「自己」「self」

「自我 Ego」はジークムント・フロイトの論が知られる。そこでは自我がエス (Es) と超自我 (Über-Ich) の間で板挟みになっている存在として捉えられる (Freud, 1924 = 2007)。だが現代の社会学でこの論に全面的に依拠した議論は少ない。これに対して、アメリカ社会心理学での議論は現代の社会学でもしばしば参照される。とくに哲学者・社会心理学者ジョージ・H・ミードの「社会的自我 social self」論やシンボリック相互行為論をはじめ、selfの社会的な発生・構成・維持・変容などが論じられてきた。この文脈では「self」の語が「自我」や「自己」と訳される ([Mead, 1934 = 1995] [Blumer, 1969 = 1991])。

社会心理学者の三井宏隆が指摘したように、社会学や心理学ではselfを過程とみるか構造とみるかで長らく混乱してきた (三井, 2000, p.33)。現代の社会心理学では、意識の主体であるego (自我) が自身を対象として再帰的に認識したとき、その対象となったものをself (自己) とみる (柿本, 2008, p.65)。このように「self」は「自己」と訳され、‘主体の再帰的对象’という理解に落ち着いた。

再帰的近代化論で知られる社会学者のアンソニー・ギデンズや「新しい個人主義 new individualism」を論じる社会理論研究者のアンソニー・エリオットなど、現代社会学の自己論

は self を過程と構造の両面から捉えつつ self の再帰性を重視する。それらは、とくに 1990 年代以降に人びとの自己語りの再帰性がいっそう高まってきた社会状況をふまえている。この状況は、グローバル化と個人化という両方向への圧力がはたらく現代社会で、人びとの自己理解が固有の強い物語をもてずに現在化・一時化・断片化してきた結果でもあった（[Giddens, 1991 = 2005] [Bauman, 2009] [片桐, 2011] [Elliott, 2014] [Elliott, 2016] [片桐, 2017]）。

こうして、社会学において過程と構造の両面から捉えられた self がその再帰性の点で重要な概念となった。現代日本の社会学的自己論ではこうした self 概念に「自己」の語があてられているといってよい。ならば再帰的な「脱」の対象としても、まずはこの self 概念を採用するのが妥当だろう。では self はどんな内的性質をもつか。self 概念を整理しつつ selfhood を考察した社会学者ハーヴィ・ファーガソンによると、それは「自身に感じられた個的性質の連続性」である（Ferguson, 2009, pp.14-15）。つまり個的で連続した内的なまとまりが self 概念の要にある。

これは当然にみえるが、実際にはこれに至る西欧特有の歴史的・社会的経緯がある。現在、「self」の語は名詞化している。だがもともと「self」は古代ギリシャ語の「auto-」にあたる語から派生した「他の誰でもない自分が」という自他分別の強意を示すものだった。名詞の「self」は 13 世紀末には登場していたが、それはキリスト教の伝統における「宗教的な罪人」という否定的な意を含んでいた。心理学史家カート・ダンジガーによると、大きな変革点はジョン・ロック『人間知性論』（1694 年第 2 版）での「意識の連続性」に基礎をおく self 理解である。17 世紀イギリス社会は内戦・革命や大火・疫病などの大混乱に見舞われ、階級や家柄といった属性原理が揺らぎ、キリスト教神学の影響も弱まっていた。こうした状況のもと、ロックは当時の新しい科学的思考を自己認識の領域に適用する。否定的な意味合いを脱色し、self を個人的で地上的な存在と捉えたのだ（[Locke, 1965 = 1972-1977, (2), pp.312-323] [Danziger, 1997a, pp.141-145] [Danziger, 1997b = 2005, 上, pp.86-90] [溝上, 1999, pp.3-4]）。

その後は個的な self が教育・統制の対象となっていき、18 世紀の哲学者・経済学者アダム・スミスの『道徳感情論』（1759 年）で、自身を能動的／受動的な側面に分割して吟味するという再帰的な発想にまでいきつく。しだいに self は個的で連続した内的なまとまりとして、物的対象と同じように発見・探究される心的対象となる。19 世紀のゼーレン・キルケゴール『死にいたる病』（1849 年）になると、理想主義的な普遍の「自我 Ich」とは違う、自己関係的な個別の「自己 Selbst」が思想的に深く問われるまでになる（[Smith, 1790 = 2013, pp.216-217] [Kierkegaard, 1929 = 1996] [酒井, 2005, pp.96-99] [平林, 2007]）。

こうした知識人層の言説は歴史的・社会的な事実とも連動している。英語で「self-praise」「self-made」「self-interest」といった新しい再帰の使用法が、16 世紀半ばから 17 世紀半ばにかけて大量に登場した。それらの多くはすでに否定的な意ではなく、しばしば肯定的な意でも使用された。また壁掛けの鏡が 17 世紀末から普及し始め、18 世紀初期には勉強・内省のための図

書室がジェントリや貴族の家屋の特徴となる。そして読み書きする人びとが一人称単数の文章表現を頻繁に使うようになる（[Tuan, 1982 = 2018, p.134] [Danziger, 1997a, p.154]）。16世紀半ばから18世紀初めにかけての西欧社会で、このように再帰的な個人意識の強まりを確認できる。

以上のように、再帰的な意識をともなう‘個的で連続した内的なまとまり’を指す self 概念は近代西欧社会で成立した。それは特定の文脈から生じたものだが、現在では特定の具体的内実には縛られない抽象的な標準的形式となり、どんな内実でもひとまず可能となっている。この点で self は再帰的な「脱」の対象として十分に広い一般性をもつといえる。

(2) 「personality」

一般に、「パーソナリティ personality」の語は性格や人柄と理解される。心理学や社会学では、社会的・自然的環境におかれた個人における、思考を含む特有の行動の傾向や様式の統一のかつ一貫的なありかたを指す。だが哲学者の河野哲也が鋭く指摘したとおり、そうした行動傾向としての personality 概念にも、じつは特定の制度的文脈が巧妙に入り込んでいる。その1つが、産業社会に対応した有用性にもとづく教育・労働制度だ（河野, 2006, pp.78-95）。

社会学の議論を例にとろう。社会学では長らく「personal」の語が「social」の語に呼応してきた。たとえばタルコット・パーソンズは、関係的欲求をもつ personality と社会化過程における役割概念をつうじた社会構造との相互浸透を捉え、アメリカ社会における両者の統合的組織化を論じた。社会学はこうした「社会組織化 social organization」とセットで、その効果が失われた「社会解体 social disorganization」を論じてきた。personality もそこに呼応し、欲求や動機や行動様式の統制がとれた統合状態（personality integration）や、その統合を欠いた解体状態（personality disorganization）が論じられた。解体状態はおもに犯罪・非行・薬物中毒といった非有用的な病理現象として捉えられた（[壽里, 1960, p.59] [Parsons, 1964 = 2011, p.110, p.139] [Merton, 1966 = 1969, pp.442-446]）。

近代社会の personality 概念には、制度とは別の問題もある。それはいわゆる道徳的な「人格」の面を含むことだ。18世紀のイマヌエル・カントが道徳法則の主体を論じて以降、他人を自分と同じく内的な尊厳をおびた person / Person（＝人格をもつ存在）とみる認識がしだいに成立した。社会学ではエミール・デュルケムの『社会分業論』（1893年）での論がよく知られる。デュルケムによると、「個人的人格 personnalité individuelle」がもつ尊厳性への畏敬こそが近代社会に生きる多くの人びとが集合しうる唯一の道徳的核心となっている（Durkheim, 1960 = 2017, pp.641-647）。このように制度の面でも人格の面でも、personality 概念には‘他人からの抽象的分離／他人との道徳的・社会的なつながり’というきわめて西欧近代的な二重性を託されていることがわかる⁴⁾。

日本では明治20年代に英語の「personality」やドイツ語の「Person」が「人格」と訳された。

「為人（ひととなり）」の訳語もよく使用されたが、明治30年代には次第に姿を消した。倫理学者でカント哲学を研究した中島力造が明治30年代に唱えた人格実現説を媒介として、明治20年代からの道徳的な人格形成の教育理念も絡みつつ、「人格」の語の定着と内的な人格観念が明治後末期の知識人層に広がった（〔佐古，1995，pp.12-36, pp.134-139〕〔鶴殿，2011〕）。

以上のように、personality 概念による議論は特定の文脈をいくつか抱えてしまっている。そのため personality 概念は「脱」の対象として広い一般性を獲得できない。

(3) 「subject」「主体」から「identity」へ

社会学において、subject をめぐる概念は装いを変え続けてきた。たとえば、もともと社会学理論では主観性（subjectivity, Subjektivität）が重要な概念だった。マックス・ウェーバーは『理解社会学のカテゴリー』（1913年）で「行為者の主観的に考えられた意味」を重視し、理解社会学の特性が「行為の意味をもった類型的な（とくに外的な）諸関係を対象にする」ことにあると述べた（Weber, 1913 = 1968, pp.16-17, 傍点訳文）。ところが「主体性 subjectivity」の語には明確な学術的定義もなく、おおむね「自己確認をふまえた能動性」くらいの意で捉えられてきた。

社会学で subject = 主体の概念に光があたったのは、むしろその批判対象としてであった。1970年代以降の構造主義やポスト構造主義といった思想流行は、人文系の学問に subject 概念を問い直させた。とくに哲学者・歴史家ミシェル・フーコーの権力や言説の概念を手引きに、自律的・固定的な subject 概念を希薄化して転覆させる作業が続いた。たとえば哲学者のジュディス・バトラーは「主体化 subjection」を「服従化 subjection」とみなし、それを「主体になる過程」を指すとともに、権力によって従属化される過程」と論じた。この過程によって言語的に構築される subject は権力の効果にほかならない。構築主義的社会学でも subject を諸権力が複雑に行き交う動的な場において捉えた。subject はそこでの言説実践の効果として事後的に析出されるものとなった（〔Butler, 1997 = 2012, p.10, p.15〕〔上野編，2001，pp.298-299〕〔小林，2010，pp.222-223〕⁵⁾。したがって「subject」を「脱」の対象と表現するとまず上記の議論と混同されてしまう。

subject 概念のかわりに台頭してきたのが、他人との関係性を大きく組み込んだ identity 概念である。1990年代以降、文化的な identity 概念の問い直しが社会学や社会学理論の領域で数多く試みられた（〔Hall and Gay (eds.), 1996〕〔Woodward (ed.), 1997〕〔Burke and Stets, 2009〕〔Lawler, 2014〕など）。2000年代には構築主義的社会学もジェンダーやエスニシティなどの領域で文化的な identity 概念の批判に向かい、identity の固定化や成熟化を煽っていく規範的な社会的言説を問題化する脱アイデンティティ論を打ち出した（〔上野編，2005〕。以下、これを指す場合はカタカナ表記）⁶⁾。この論はひとを社会的に拘束し固定化する権力的な諸作用全般を対象とし、諸個人をそれらから解放しようとする。

この問題提起は本稿の問題意識とも近い。だが大きな問題もある。その1つが、脱アイデンティティ論だけでは「脱」が徹底しにくいという点だ。自己心理学者の榎本博明の論を借りつつ説明しよう。自己の identity は自己物語 (self-narrative) として捉えうる。私たちは自身が巻き込まれている文化の型や社会的な規範からそう自由ではないので、自己物語も実際には文化的・社会的な産物だ。このことが逆に他人からの理解・共感の可能性も開いている。したがって、社会的な自己物語をラディカルに変更しても、多くの場合はたんに主流の物語をより異端的な物語に置き換えていくだけとなる (榎本, 2011, p.12, pp.17-18)。

脱アイデンティティ論の展望でも実際には諸個人が別の社会的規範をおびた物語を置き換え、再構築するほかない⁷⁾。あるいは、再構築しきらないうちに別の物語へと移行するしかない。種々の自己物語の「脱」を超え、自身を捉える再帰的な枠組みの形式にまで議論を進めなにかぎり、「脱」は徹底しえない。この点で identity 概念による論は限界をもつ。

(4) 「私」

専門用語ではないが、「私」の語も検討しておきたい。「私を変える」「私探し」などのように、self 概念に「私」の語をあてる場合もあるからだ。

日本語では「私」「ぼく」をはじめとする多くの1人称代名詞がある。それらはひとが関係性のなかで生きる立場をさまざまに示している。一般に日本語では「私」が「公」と対になる。ところが「私」は「公」から独立しているともいえない。公は「大宅」＝「第一の家」の意で、天皇(家)や朝廷を指したことはよく知られる。近世でも「私」は幕府や藩主といった「公」の支配のもと、何らかのかたちで限定的に「許された」領域を指した。つまり「私」は「公」の側面を含んでいた (永澤, 2010, p.199)。

「私情」「私心」などの語でもわかるように、このことから「私」には負の評価が含まれることがある。現代でも「私」は観念的には個人や個人的領域を指しうるが、現実には「公」から全く独立したともいいにくい面がある。実際に、「私」の語の使用はけっしてニュートラルではない。たとえば「私の言語学」という表現だと「みなさん見てください。これが私の言語学です。」と外向きに世間などへ向かって明言するような意味合いが生じうる (廣瀬, 2017, p.5)。「公」に対立するように見えるが、それはあくまでも「公」の場で主張されている。これらの事情から、「私」の「脱」にはどこか倫理的・求道的・脱世間的な特定のニュアンスが強く出てしまう (この点は「我」の「脱」も同様である)。したがって、「脱」の対象としての「私」は広い一般性を獲得できない。

本節の作業は「脱」の対象としての妥当性という観点からの限定的な議論にすぎない。だが少なくとも本稿の問題関心からすれば、再帰的な意識をとまなう「個的で連続した内的なまとまり」を指す西欧近代社会由来の self がさしあたり妥当な概念だと確認できた。また、多くの諸

用語と違って特定の内実や展望やニュアンスに縛られない点で、self 概念は「脱」の対象として広い一般性を充分にもつことも確認できた。

4. 「自分」という語に着眼する社会学的意義 —— 「自己」との比較

「脱」の対象となる self という見通しのもと、本節以降では諸分野の研究成果を数多く借りながら「自分」という語と概念を検討したい。とはいえ、各研究分野では堅実で精確な専門的議論がさまざまに展開・蓄積されており、それらの概観や吟味は本稿筆者の力量を超える。だが管見のかぎり、社会学の側が「自分」をめぐる従来の研究成果を充分に採り入れてこなかったのも事実である。今後のたたき台としての試みにはなるが、その研究成果の導入は少なくとも本稿の目的にとって必要な作業である。

本稿は諸分野の各論点を本稿の問題関心にそくして限定的にとりあげ、それらを細い点線のように繋げながら議論を進めていく。したがって、本稿で導出される社会学的な結論もそれにもとづく1つの理論的仮説である。

さて、「自分」の語をもとに self 概念を社会学的に捉えるうえで、避けては通れないのが「自己」という語の問題である。もちろん、再帰的な意識をとまなう‘個的で連続した内的なまとまり’を指す語として、現代日本では「セルフ」「自己」よりも「自分」が社会的に広く受け入れられている。たとえば、1990年代から出版数が増加した自己啓発書にも、「自分」の入ったタイトルが目につく。社会の流動化に適応するかたちで個人の self が多元的になるにつれ、かえって「本当の自分とは何か？」という内的な問いが広い範囲で呼び起される。それは人びとに高度な再帰的コントロールと感情マネジメントを要求する、社会の個人化・心理主義化ともパレレルだ〔森, 2000〕〔牧野, 2012〕〔矢田部, 2012〕〔浅野, 2016〕。こうしたことから self 概念はさしあたり「自分」の語でカバーできよう。

しかし学術の用語としては、慣例どおりに「自己」を選択するのが妥当にもみえる。「自己」はすでに『藤氏家伝』（760年頃）で「寵幸近臣宗我鞍作、威福自己」（＝現代語訳「皇極天皇に寵遇されていた侍臣、蘇我入鹿〔宗我鞍作〕は、威厳と恩恵とで周囲を自分に服従させ」）といった形で使われていた（沖森・佐藤・矢嶋訳, 2019, p.17）。この現代語訳で「自分に」となっている点は非常に興味深いが、ともあれ「自己」の語は充分な歴史をもつといっていよい。そこまで遡らなくても、明治20年代に深く苦悩した評論家・詩人の北村透谷が「『自己』という柱に憑りかゝりて、われ安し、われ樂しと喜悅するものの心」を批判した言表のように、近代以降でみても self に「自己」の語を充てて理解する知識人層の慣習は長らく続いてきたといえる（北村・勝本, 1970, p.305）。

また次のような見解もある。実存主義哲学研究者の飯島宗亨は自己論で「自分」の語を避けるべき理由を「分」という語に求めた。「分」は1つのものを分けるところから「持ち分」の意

をもつ。たとえば、「気分」という語では気の分有形態が現象的事実になっている。こういう「分」の語用が社会的に捉えられたとき、‘身の分有’ = 「身分」の語が生まれ、封建的な階級社会での身分が成立する。「分際」「分を知る」「分をわきまえる」などでは、「分」の語だけで身分の意を示す。つまり、「自分」の語用は封建的秩序意識や階級・財産などにもとづく社会的評価などの意を含みうる。このため、哲学的な議論を展開するうえでは「自分」の語を用いないほうがよい（飯島、1992, pp.25-26）。

たしかに‘自身’を意味する「己」と違って、「分」の字は‘刀で切りわけ’の意から来ている。そこから‘分け前’という意味が生じ、前近代的な表現で使われてきたのは事実だ。現代では封建的身分制がその語用に直接反映されていないにしても、学術的議論を展開するにあたり、何らかの‘夾雑物’が混じっている「自分」は「self」の訳語として不適切かもしれない。こうした見解が社会学でも暗に共有されてきた可能性はある。

ところが見方を変えれば、この‘夾雑物’に社会学的議論の突破口をみることもできる。飯島自身も述べる（同、pp.223-224）ように、身分制はさまざまな関係のもとで空間的に連鎖し、重層構造を生む。被抑圧者が別のところで抑圧する側に立ってしまう例は現在でも多い。歴史的にも身分的序列構造は村やイエに残存してきた。生産・消費・祭祀・土地利用などの実態としてもそれを後追いつける支配や統制としても、共同体の関係構造は近世まで長らく機能してきた。その関係構造は工業や貨幣経済などの発展とともに複雑化したり解体的に変容したりしつつ、新たな階級分化も生む。明治以降も、それらはある程度追認されながら行政的な再編成を受けてきた。人びとをめぐるこうした現実的な関係構造の問題こそ、社会学や社会史研究が考察・実証を重ねてきたものだ（〔中村、1971〕〔中村・木村編、1976〕〔福武、1987〕〔荒木田、2020〕など）。

社会的な関係構造は個人の文化とみえるものにも現れる。たとえば日本の箸や茶碗といった食器類の個人専用化も、特大だった家長の食器との接触を防止したことから発生しており、じつは集団内の序列構造にもとづいている（作田、1996, p.71）。携帯電話会社の出資によって作られた日本のインターネット銀行が「じぶん銀行」という商号を選んだことにも、現代社会のITや移動の文化がもたらした社会的関係性の変容が反映されよう。私たちの意識や身体性も、特定の歴史的・文化的背景をもつ当該社会のさまざまな意味や規範とその作用をつうじて構築されている。

「自己」の語の学術的使用が間違っているわけではない。だが‘夾雑物’を除去したつもりで「自己」の語の無自覚な使用は、以上のような社会学的な知見や見方を遮断してしまう面がある。むしろ、その遮断が学術的な議論のうえで有効である場合は何も問題がない。しかし歴史的・社会的・文化的な影響を大きく受けた複雑な構成体が「脱」の対象となる場合、その考察で具体的な‘夾雑物の手触り’を見落とすわけにはいかない。社会的関係性や社会構造の痕跡を具体的な自分のありかたに読み込みつつ、それらを含む自分を「脱」する対象として捉えるのは（実

践者にも研究者にも) 十分に可能であり, 必然でもあろう⁸⁾。この点から, 本稿のような問題関心をもつ議論ではやはり「自分」の語に着眼し, その概念および歴史的・社会的・文化的な特徴とそれらの変容をある程度汲みとらなければならない。

5. 語用的特徴からみた「自分」の性質 ——個別性と標準性

では, 「脱」の対象となる自分の性質 (= ‘夾雑物の手触り’) をどう考察できるか。語の概念とその語の用いられかたとは密接につながっている。本稿の視点からではあるが, まず本節では日本語研究の成果に従って「自分」の語用的特徴をごく簡単に確認する。そしてそれを次節以降で展開する自分についての具体的議論の出発点としたい。

一般に「自分」の語は「自分のことは自分です。」といった再帰代名詞の用法が多い(遠藤, 1983, p.185)。再帰代名詞「自分」は英語の -self 形などとは異なる振舞いをしたり照応関係での特殊な拘束性を示したりすることが知られ, 日本語研究でも活発に論じられてきた([Oshima, 2006] [McCready, 2007] [小葉, 2017] [Noguchi, 2017] など)。

まず大きな特徴として, 「自分」の語はその動作・状態の主しか指せない。英語の再帰代名詞の先行詞は, その文の主語の場合も主語以外の名詞句の場合もある。それに対して, 日本語の(単文中での) 再帰代名詞「自分」の先行詞はその文の主語だけである(久野, 1973, p.191)。

つぎに, 「自分」はその動作・状態の主を他の人と区別して特別扱いするときに用いられる。たとえば, 「太郎は彼の子どもを店員として使った。」と「太郎は自分の子どもを店員として使った。」では, 話し手や書き手の意識が異なる。前者の「彼」はたんに「太郎」も指しうるものだが, 後者の「自分」は「太郎」のみを指す。では両者ともに「太郎」を指すとしよう。そのとき, 前者では話し手が特別の意味を見出しておらず, 誰の子どもでも同じだと(暗に)感じている。これに対して後者では, 「太郎」が自身の子どもの使うことに話し手や書き手が特別の意味を感じている。日本語研究者の藤井正が指摘したように, 後者には何らかの驚きや非難などの感情がこもっている(藤井, 1986, pp.626-629)。このように「自分」の語用は話し手や書き手の判断・感情から自由になりにくい。いいかえると, 「自分」の語用で表現者の意識が表現対象と完全には分離していないのである。

さらに, 別の特徴をみよう。次の2文での「太郎」と「自分」は同一人物とする。「太郎は, 皆が自分の悪口を言っているとき, 隣の部屋で雑談していた。」という文は適格ではない。それに対して「太郎は, 皆が自分の悪口を言っているとき, 隣の部屋で盗み聞きしていた。」という文は適格である。後者の「自分」だけが適格に「太郎」を指せるのは, 「自分」が悪口を言われているのを「太郎」が意識(認識)しているからだ。「自分」の語用におけるこうした‘意識の制約’という問題に着目したのは言語学者の久野暁である。日本語研究者の友田英津子は久野の論をうけて「自分」の語用の特徴を考察した。友田によると, 「頼りになるのは自分だけだ。」な

どのように、話し手や書き手が自身を客観的に眺めていたり状況を一般論のように捉えていたりすると、「自分」が使用される傾向がある（[Kuno, 1972, pp.182-187] [友田, 2006, pp.101-105]）。つまり自身への対象的な認識が成立しており、そのうえで自身を突き放すような表現をおこなうときに「自分」の語が要請される⁹⁾。

以上を小括すると次のようになる。「自分」の語が要請されるのは、表現者の意識が動作・状態の主（＝表現対象）と完全には分離せず、それを特別扱いしているときだ。両者が同一の場合は自身を特別扱いする認識が成立し、そのうえで自身を突き放すような表現がなされている。第1節でみたとおり、再帰的な「脱」の対象語としても「自分」が呼び起されやすいわけである。

こうした「自分」の語用的制約の要を言語文化的な原理の面から捉えなおそう。この点については、3つの重要な「自分」の用法を分類した言語学者の廣瀬幸生の論が重要である。それぞれの例としては、A「太郎は自分が楽天家だと思っている。」、B「太郎は昨年、自分の生まれた町を再訪した。」、C「太郎は自分が嫌になった。」である。Aが「自分」の用法の基本であり、私的表現行為を担う「私的自己」（private self）を表し、BとCの元となる。Bの「自分」は視点的用法であり、話し手や書き手が状況の動作主に視点を投影している。Cの「自分」は再帰的用法である。こうした私的自己は個人的な思考・意識の担い手である。反対に、伝達という社会的な公的表現行為の担い手は「公的自己」（public self）となる（廣瀬・加賀, 1997, v, p.6, p.11, p.65）。

廣瀬らの指摘によると、英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語などでは自己表現の中心が公的自己にあるが、日本語ではそれが私的自己にある。そのため、思いを言語化しただけの日本語文は私的表現と解釈される（「今日は金曜日だ。」など）。それを他人に伝達するためには、聞き手との対人関係を考慮した公的表現を用いる必要がある（「今日は金曜日だよ／です。」など）。これは一人称表現にも大きく影響している。英語では一人称表現の「I」が聞き手と対峙する伝達主体（＝公的自己）を表す固有語であり、基本的には「I」以外の語が不要だ。それに対して日本語では、「自分」が私的自己を表す固有語である反面、公的自己を表す固有語がない。日本語では相手との関係性からそのつど公的自己を規定せざるをえず、私的な「自分」を公的には「私」「ぼく」「お母さん」「先生」などで多様に表現する（[廣瀬・加賀, 1997, p.13, p.19] [和田, 2008, p.283] [廣瀬, 2017, p.13]）。

したがって「自分」の語用的特徴の要は具体的な対人状況に依存しない点にある。このため、日本語の私的表現性も作用しつつ、「自分」の語を用いたときには表現者の意識が表現対象の意識に重なり、結果としてほとんどそのまま入り込む。表現対象の特別扱いはこのことと大きく関連していると推察される。一人称の文など、表現者と表現対象が同一の場合は、私的自己の個人的な意識・思考の個別性を強めて自己完結的に語ることになる。これは「自分」の語そのものが何らかの意味内容をおびることにもつながるだろう。また一方で、具体的な対人状況に

依存しないこうした標準的な「自分」の自己完結性は、対他的な関係性のもとで生じる表現者自身の個別的な属性とも距離をおくことになるだろう。それが「自分」の語用における自身を突き放すような表現効果を導いているのではないかと推察される¹⁰⁾。

以上から次の点が確認される。表現者と表現対象が同一の場合、「自分」の語用は自己完結的に意識・思考の個性性を強めつつも、自身の個別的な属性と距離をおく標準性をもつ。

6. 「自分」の語と概念の歴史的・社会的経緯 ——近代日本における自分の self 化

前節で確認された特徴を「自分」の語が初めから一貫して備えていたとは考えにくい。初出とみられる「自分」は『漢書』「李広蘇建伝」での「武曰自分已死久矣」である（小竹武夫訳では「自分としては、もうとくの昔に死んでいるつもりなのです。」となっている。[班固／小竹訳, 1998, p.237]）。なるほど、江戸後期の国学者である橘守部『俗語考』（天保12年）はこれを「自分」の例文とした。とはいえこの『俗語考』の同項目での例文はこれのみである。日本語学者の遠藤好英によると、じつは当時において『漢書』のこの箇所がこの訓読に固定されていたともいえず、当時の辞書でも「漢語と紛らわしい邦語」とされていた。またこの箇所は「自ら～と思う」の意味で使われており、一般に漢籍での「自分」は「自ら分かつ」の意味で用いられる。一単語としての「自分」は近現代中国語にいたるまで漢語の用例がなく、じつは和製漢語といってよい（[遠藤, 1983, pp.185-186, p.192] [金, 2014, pp.24-29] [橘編, 1922, p.258]）¹¹⁾。こうしたことは、単語としての「自分」の語用やその特徴がおおむね日本の歴史的・社会的・文化的な背景のもとに成立してきたことを示唆する。

本節では、日本語研究や文学研究の成果に従い、前節で確認された「自分」の語用的特徴にいたる歴史的・社会的経緯を考察する。そして西欧近代の self 概念と重なる自分という概念の成立を、近代日本における一定の社会的現象として捉えたい。とはいえ経緯を網羅的に述べる余裕はないため、代表的・象徴的な事例をつうじて粗描する。

「自分」という表現は平安時代の勅撰漢詩集である『文華秀麗集』（818年）の「自分陽精応覧」や『経国集』（827年）の「自分独遅遇重陽」からある。だがこれらは「自ら分とす」（自ら～をわけもっている）と解されるもので、じつは「自分」という単語の用例ではない（[小島, 1995, p.3345, p.3350] [小島校注, 1964, p.290]）。「自分」に「じぶん」という発音が付された一単語としての例は15世紀の室町期なかごろの用事集・国語辞典『文明本節用集』にみられる。「自分」という語はおおむね中世期に成立したといってよい（金, 2014, pp.26-29）。

「自分が行きます。」のような一人称代名詞「自分」は、近代の軍隊や刑務所といった社会的文脈で生まれた語と思われがちだ。しかし散文では中世後期の古辞書の用例で初めてみられ、実際の散文中に例がみえるのは近世からのようである。一人称代名詞「自分」の多くは武士階級

の男性が改まったときに使われた。関西では「自分」を二人称として使用する（「自分、それはないで。」など）が、それも元は「御自分」「御自分様」という中世末期の武士階級の言葉づかいに由来する。「自分」は「御」がつくと二人称（つかなければ一人称）を示したが、近世をつうじて次第に敬意が落ちる（遠藤，1983，p.186，p.188）。

軍隊や刑務所で一人称「自分」が用いられた経緯や理由はほぼ判明している。近代の兵隊は全国各地から召集された人びとの集合である。育った地方の方言が濃厚に染みついた自称語はバラバラで、制度的な上下関係をふまえて一律に誤解なく使用できる標準的な語を選択・決定する必要があった。こうして「自分」の語が採用されたのである（[杵浦，1993，p.36] [木川，2011]）¹²⁾。

このように「自分」の語用は歴史的にやや入り組んでいる。社会的階級や人びとの関係性にも影響されている。では、「自分」の語はいつ多くの人びとに通用するように一般化＝標準化され、どのように（「脱」の対象となりうるほどの）一定の意味内容をおび始めたのか。

中世以来の自己表現の変遷を研究した森雄一によれば、日本語の私的自己優位は歴史的にも長らく続いてきた。公的自己を表す語は多様に変遷し同時代でも多種の表現がみられたのに対し、私的自己を表す語は「われ」「おのれ」「自分」の3語が中心だった。中世後期には「おのれ」が衰退し、現代ではほとんど「自分」の語だけである。「われ」という私的自己表現は明治前期にも残っているので、「自分」がどう広い範囲で台頭してきたのが重要な問題となる（森，2017，p.215）。

また日本語研究者の永澤済は、近世以来の「自分仕置」「自分家」「自分髪」といった複合語の衰退と現代の「自分仕様」「自分流」「自分史」といった複合語の台頭を考察した。「自分」の語は、前者のような‘空間的領域の表現・発想をもつもの’から、後者のように空間表現的性格を失って‘常にその人自身だけを指すもの’へと変化してきた（永澤，2010）。この論は重要な知見を与えてくれる。それは、「自分」の語意が局所化してきたことだ。身体や‘夾雑物’を含んだ自分をふまえると、現実には「自分」の空間的性格が完全に消失するわけではない。近代以降、しだいに局所的な私的自己を表す「自分」の一般的用法が確立されたと考えられる。

したがって、「自分」の語意が個的に局所化しつつ、その語用がたんなる再帰的な用法や特定の階級・ジェンダーといった属性原理をある程度超えていく時期を考える必要がある。そのとき標準的な一般名詞としても使われる下地ができたといえる（＝標準性）。そのうえで、「自分」の語が「脱」の対象となりうるほどの意味内容をもつには、表現者が「自分」の語を自身に用いて個人的な意識・思考を自己完結的に表現できるようになることも必要だ（＝個別性）。以下、やや長くなるが、書き言葉にそくしてこれらを具体的に確認しよう。

「自分」はまず視点的・再帰的な用法の名詞として、階級・ジェンダーを超えた一般性を獲得した。日本最初の英語で書かれた日本語辞典である J.C. ヘボン編『和英語林集成』（第2版，明治5年＝1872年）では、英語の名詞「Self」に対応する日本語として「Ji-bun, ji-shin, onore,

midzukara, hitori de, mi, ikko」が示され、近代初期には「自分」の語が中立的な一般性をもち始めていたことがわかる。文学での実例だと、言文一致体の先駆とされる二葉亭四迷『浮雲』（明治 20-21 年）での会話文「母親さんは自分が清元が出来るもんだから其様な事をお言ひだけれども」や地の文「自家も安心しやうといふ文三の胸算用は是に至ツてガラリ外れた。」などの視点的・再帰的用法がそれだ（[坪内編, 2000, p.42, pp.108-109] [谷川, 2008, p.157]）。

時代が進むにつれて、階級・ジェンダーを超えた一般性をもつ一人称代名詞「自分」の使用も増加し、初の近代的国語辞典である大槻文彦編『言海』（「自分」の項がある第 3 分冊は明治 23 年）でも、「自分」の語が名詞「オノレ。自身」とともに代名詞「自称ノ代名詞。我吾。」として記載されている。とはいえ、「自分」という一人称が近代初期に数多く見られたのは、警察や裁判で取調べられた被疑者の言葉を書き留めた口供（口書）だった。明治 5 年の司法省による法廷での平等待遇の通達などと連動しつつ、動機・目的・結果という犯罪の因果律に従った簡潔な口供が作成されてゆき、そこにきまって「自分」という一人称が画一的に嵌め込まれていった。この近代制度的な標準化のもと、当該の個人を示す「自分」の語が内的な連続性を前提とする法的主体の成立に応じて導入された点は、きわめて象徴的である。ふつうの口語文の書き言葉においては、一般性をもつ一人称代名詞としての「自分」が明治 20 年前後から現れたとみられる。明治 10 年以来、言論の力によって官憲の非違を正そうとする漢文くずし文体の政治小説が新聞紙上を中心に隆盛していたが、その時期がちょうど終わるころにあたる。またそれは翻案小説の時代が終わり、坪内逍遙『小説神髓』（明治 18-19 年）や二葉亭四迷の『小説総論』（明治 19 年）などが書かれる、近代小説が開始されようとした時期でもあった（[遠藤, 1983, p.189] [中村, 1954, p.19] [谷川, 2008, pp.155-169]）。

階級・ジェンダーを超えた一般性をもつ一人称代名詞「自分」は、書き言葉での地の文で数多く使われていった。特定の具体的な相手がいる会話文と違い、不特定多数の読み手へ一方的に語りかけられる抽象的性質をもつ一人称だったからだ。これは、「自分」の語用が具体的な対人状況に依存しないという点と呼応する。こうした性質を広く社会的に成立・普及させるうえで大きな媒介となったのが、明治・大正期の自分小説と呼ばれる作品群だ。自分小説とは、一人称「自分」を使う語り手をもって成り立つ小説である。私小説の源流ともいえる自分小説は志賀直哉や武者小路実篤といった白樺派の作家たちによって数多く書かれた（[遠藤, 1972] [木川, 2011, p.51] [下岡, 2016, pp.1-2]）¹³⁾。

興味深いことに、自分小説と日本近代小説はその誕生の時期がわりと重なっている。自分小説は二葉亭四迷がツルゲーネフの小説の翻訳「あひゝき」（明治 21 年）と「めぐりあひ」（明治 21-22 年）を書くなかで創始された。原文を勝手に書き換えた翻訳小説が多かった当時において、二葉亭の翻訳作業は原文の調子をそのまま移植しようという格闘であり、代名詞「自分」はそこで人称の抽象的性質が必要とされたさいに独創的に採用された¹⁴⁾。翻訳ではない創作小説としては、明治 22（1889）年の『都の花』に掲載された矢崎嵯峨の舎「初恋」が嚆矢である。

自分小説は同時代の他の文章と大きく異なった。重要なのは、「自分」の語と回想体が関連深い点だ。実際に、二葉亭訥の「あひづき」も「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有つた。」という回想の表明で始まる。高瀬文淵『詩篇 若葉』（明治26年、「詩篇」とあるが散文小説）、国木田独步「武蔵野」（明治31年）、田山花袋「野の花」（明治34年）「重右衛門の最後」（明治35年）、島崎藤村「津軽海峡」（明治37年）「朝飯」（明治39年）などの自分小説群も、回想による物語形式と文体をもつ。自分小説は明治30年代に一般化した。それは言文一致体の小説が普及した時期にもあたる（〔二葉亭訥, 1955, p.6〕〔遠藤, 1972, pp.54-57〕〔遠藤, 1975, pp.48-59〕〔後藤, 2002, p.35〕〔谷川, 2008, p.154〕）。

日本近代文学研究者である後藤康二の論を借りつつ、「自分」の語の出現をみよう。よくわかる一例として、初の創作小説である矢崎嵯峨の舎「初恋」（明治22年）冒頭部をとる。

ああ思い出せばもう五十年の昔となった。見なさる通り今こそ頭^{かしら}に雪を戴^{いただ}き、額にこのような波を寄せ、貌^{かお}の光沢^{つや}も失せ、肉も落ち、力も抜け、声もしわがれた梅干^{うめじ}し老爺であるが。これでも一度は人生行路^{ふみはじ}の踏始め若盛りの時分にはいろいろ面白いこともあったので、その中で初めて慕わしいと思う人の出来たのは、そうさ、ちょうど十四の春であったが、あれが多分初恋とでもいうのであろうか、まアそのことを話すとしよう。（矢崎, 1970, p.54。シロテンは読点に変更、以下同じ）

「初恋」の冒頭部分で、語り手は「ああ思い出せば」「見なさる通り」「そうさ、」「まアそのことを話すとしよう。」などといった、聴き手のいる状況を念頭においた文体を用いる。ところが、第2段落で回想に入ると急に記述的な文体に変わる。

母があのように賞めちぎる娘、たおやかな江戸の人、その人と話をする時には言葉使いに気をつけねばならぬという、その大した江戸の人はまアどんな人なのであろうか？ 早く遇いたいもの、見たいもの、定めし面白い話もあろう、と自分の小さな胸の中にまず物珍しい心が起って、毎日このことをのみ姉と言いかわして、珍客の来る日を待っていた。そのうちにいよいよ前の日となると数ならぬ下女はしたまでが、「江戸のお客さま、お客さま」と何となく浮き立っていた、まして祖母や姉なぞは、まして自分は一日を千秋と思っていた。（同, p.54）

このように、回想とともに文体が記述的なものに変容するなかで、主人公は自らを「自分」とし始める。回想体による描写であるのに「語る－聴く」という具体的な関係性が消去され、読み手は「自分」の内的世界へと誘引される。後藤が指摘したように、「初恋」の冒頭部分ではそうした2つの文体の「段差」が明確に露出している（後藤, 1988, pp.47-50）。「自分」の語ととも

に個人の意識内での自己完結的な表現が可能となったことを確認できよう。

ただし、詩人の蒲原有明が二葉亭の訳文について告白したとおり、内的世界へと誘引された当時の読み手は「一種名状し難い快感」とともに「餘に親しく話されるのが譯もなく厭であった」という感想もいただく（二葉亭訳, 1955, p.209）。とくに二葉亭が「自分」の語を用いた文章の多くは読み手を内的世界に誘引する傾向にあったと考えられる。「自分」の語は随想での確認やまとめの文でも現れ、その文は精神活動に深く関係する動詞をおおむね述語としていた（遠藤, 1972, pp.54-57）。「自分」を導入した内的対話性の実現は読み手にとってそうとう強烈な事態だったとみてよい。このためもあってか、自分小説にも2つの文体が混交する過渡的な例がみられる。たとえば、国木田独歩の小説「酒中日記」（明治35年）の一節である（国木田, 1939, p.46）。

驚き給ふな源因がある。第一、日記といふ者書いたことのない自分が斯うやつて、こまめに筆を走らして、如何でもよい自分のやうな男の身の上に有つたことや、有ることを、今日からポツポツ書いて見やうといふ氣になつたのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。

より象徴的な例として、田山花袋の小説「野の花」（明治34年）をみよう。この作品は小説家の正宗白鳥との「野の花」論争で知られる。花袋は序文で「作者の些細な主観」（田山, 1968, p.14）が混じった小説を批判した。ところが白鳥は『読売新聞』で「野の花」の語り手こそ作者の主観だと書いた。語り手による地の文は何度も運命について情感的に述べる。それは「敢へて直ちに之を作者の面影なりとは云はざるも」、「君が作の何れにも漂」う「多く類性のもの」を描くにとどまる（〔正宗, 1983b, p.13〕〔正宗, 1985, p.20〕）。こうした見解に対し、花袋は「運命の儚きを感じずる」のは「大自然の主観」につづじる語り手、すなわち作中人物の主観だと反論した（〔根岸, 1987, p.33〕〔田山, 1995, pp.558-569〕）。

花袋の反論の可否はともかく、白鳥の見解はこの小説の文体や視点の混乱から生じたと推察される。冒頭部は「大學に居た頃だから最早餘程以前の事だが……と、なにがしといふ男が話し出した。」という記述的描写だ。その後で回想体が始まる（田山, 1968, p.15）。ところが「男」の語りは次のように展開する。

自分は唯此処に自分の今話さうとして居る話を成たけ他人の事を観察したやうな心で詳しく話して見やうと思ふ。それにしても何処から話したなら一番筋が通つて一番よく解るであらうか。さうだ彼処から話さう。彼処から話せば一直線で、単純で、其上運命が嵐の様に來て、まだ咲かぬ蕾や、咲き懸けた花を散して行く酷い様が好く顯れて見えやうから——それは前にも言つた通り自分の廿三の夏で、もう今一日で文科の一学年の定期試験が済ん

で了ふといふ日の午後であつた。[中略] 明日が済めば、もうこんなに暑い東京に居ないでも好いのだ。故郷のあの利根川の畔を、詩でも吟じながら、悠々と散歩する事が出来るのである。(同, p.15。漢字は旧字を改めた。以下同じ)

このように「男」の語り始めは聴き手との具体的な関係を匂わせていたが、すぐに記述的文体で地の文が展開される。にもかかわらず、また地の文で「あ、この青年の狂熱といふもの……」などと思入れの強い表現を挟んだり「悲しいのは運命!」といった詠嘆で作品が終わったりする(同, p.19, p.57)。冒頭部で「男」の語りを聴いて記述していた視点が宙に浮いたまま終わる奇妙な構造も合わせて、この小説は文体や視点が揺らいだ印象を読み手に与えたと考えられる。

こうした諸事例は、「自分」の語による文章表現の自己完結性が一挙に完成したわけではないことを示す。おそらくは明治20年代から30年代にかけて幾重にも文体や人物視点が混交・進退しながら、そうした自己完結性がしだいに達成されていったとみるべきだろう。

対人状況に依存しない記述的文体による書き手自身の内的表象も、おおむね近代小説が主導したものともてよい。「私小説」(「私は小説」「『私』小説」とも言われた)の語じたいは大正10(1921)年前後に新聞雑誌で使われ始めたようだが、実際の私小説にあたる小説は日露戦争後の明治39(1906)年あたりから頻繁に書かれ始めていた。明治40年代の新しい小説群について、小説家の宇野浩二は「私」「自分」といった「一人称の人物が作者その人らしく書いてあるのに、私は驚かされた」と述べる。日記の習慣も社会的に広がっており、明治43(1910)年ごろには水野葉舟『日記文』などの作法書が多く刊行され、一人称による内的表象が発達した(『日比, 2002, p.9』[平野, 1972, pp.369-371] [宇野, 1972] [山口, 2011, pp.221-222])。こうした事実は、一定以上の知的教養をもつ階層が中心であるとはいえ、現実にもとづく再帰的な内的表象が明治後末期の日本社会にだんだん浸透し始めていた証左だろう。

書き手が「自分」の語のもとで自身の意識・思考を自己完結的に表現できたとき、当然ながらそこには何らかの文学的・心理的・思想的な意味内容が書き手自身の個的な形式にそって呼び込まれている。なかでも「自分」の語を用いた「一人称の人物が作者その人らしく」なったことは、局所化しある程度まで一般化＝標準化もされた個的な形式(＝自分)が、文章で表現されている意味内容にもとづく個別の「中身」を獲得しえたことを示す。そして文章の読み手にもそうした形式と中身が「自分」の語にそくして伝わりえたことを示す。大正末期においては現代にも続く自分の理解の原型を確認できる。大正14(1925)年に小説家の久米正雄は自分が自分を書いた私小説こそが真の散文芸術であり、それは心境小説でなければならないと述べたが、心境じたいは次のように形式的な面から説明されるのだ。

心境とは、これを最も俗に解り易くいえば、一個の「腰の据わり」である。それは人生

観上から来ても、芸術観上から来ても、乃至は昨今のプロレタリア文学の主潮の如き、社会観から来てもいい。が、要するに立脚地の確実さである。其処からなら、何処をどう見ようと、常に間違いなく自分であり得る。(ここが大切だ。)心の据えようである(久米, 2003, p.360。傍点および()は引用文のもの)。

一般化＝標準化された形式的な面も含めるこうした自分の捉えかたは、久米の独創ではない。たとえば、プロレタリア文学作家の葉山嘉樹も、同じ大正14(1925)年の「淫売婦」で「この時私が、自分というものをハッキリ意識していたらば、ワザワザ私は道化役者になりやしない。」と書く(葉山, 2021, p.15)。この作品は私小説ではないが、この「自分」という一般名詞の使いかたは久米のような理解を想定したものとみてよい。こうした個別の中身を前提とする標準化された形式としての自分は、文学者を中心に一定程度には共有された理解だといえよう。

本節からは次のことが明らかになる。上述のような歴史的・社会的過程を経るなかで、「自分」という語を用いた文章表現の変化のもと、自分の概念が「個的で連続した内的なまとまり」を指す西欧近代の self 概念に近づいていった。その過程は自分の self 的な一般化＝標準化という一定の社会的現象でもあり、端的に「自分の self 化」といいうる。

ただし前節で確認したように、「self」と違って「自分」の語用にはやや特殊な面があった。つまり両者には語用において原理的に異なる点があるままに、名詞としての概念が重なっていったことがわかる。

7. 再帰的な「脱」の対象となる自分 —— 明治後末期以降の文学的言説

大正初期に書かれた夏目漱石の小説『ころ』(大正3年)は、近代的な個人におけるエゴイズムの問題を批判的に捉えた文学作品の代表格とされる。実際に、「ひとに愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。」「私はどっちにしても自分が不愉快でたまらなかったのです。」などのように、この作品では自分への再帰的批判の言表がいくつも出てくる。言語学者の野口徹は『ころ』での「私は一人で自分を嘲笑しました。」を典型的な例としつつ、「自分」の語の「真に genuine」再帰的な使用が始まったのは明治期だとみた(〔夏目, 1996, p.323, pp.412-413〕[Noguchi, 2015, p.60])。この指摘は前節でみた自分の self 化と呼応する。とくに明治後末期の日本社会では、ロマン主義文学や自然主義文学の展開をつうじて「近代的自我」が知識人層を中心にある程度まで解放・確立されつつあった。だが同時に、文学的表現においては逆に自分が再帰的な懐疑・否定＝「脱」の対象ともなる条件も揃ってきた。本節では、「脱」の対象となっていく自分を具体的事例にそくして捉えたい。

全面的に「自分」の語ばかり使われたわけではないが、自身を再帰的に捉えて具体的・実質的な宛先がないままに否定する文学者の言表は、実際に明治後末期から大正期にかけての日本

社会でだんだん現れていく(鍵本, 2017)。芥川龍之介が大正 8 (1919) 年に新聞の文芸欄(「日々文芸」『東京日日新聞』)で発表した「後世」などにいたると、再帰的否定はそうとう手の込んだ複雑なものとなっている。

私自身と雖も、私の愚を笑ふ点にかけては、敢て人後に落ちやうとは思つてゐない。唯、私は私の愚を笑ひながら、しかもその愚に恋々たる私自身の意気地なさを憐れまずにはゐられないのである。或は私自身と共に意気地ない一般人間をも憐れまずにはゐられないのである。(芥川, 1996, p.296)

では「自分」の語が使われた再帰的否定の事例を追ってみよう。明治後末期の代表的な事例は、正宗白鳥の自然主義小説『何処へ』(明治 41 年)である。それは「主義に酔はず読書に酔はず、酒に酔はず、女に酔はず、己の才智にも酔へぬ身を、独りで哀れに感じた。自分で自分の身が不憫になつて睫毛に一点の涙を湛へた。」「世界に取り残された淋しい人が一人ある。」と、自分が頼りなく厭になるといった暴露的で否定的な内的表象によって、同時代の知的青年層の共感を呼んでいた(正宗, 1983a, p.253, p.273)。現代人からすれば凡庸に見えるこうした再帰的否定の言表も、当時はかなり斬新だった。

詩人・評論家の石川啄木は明治 43 (1910) 年 2 月『東京毎日新聞』掲載の「性急な思想」で、こうした新しい文学的流行をふまえ、文壇や思想界にみられる目的意識のない否定的心性を「建設の為の破壊であるといふ事を忘れて、破壊の為に破壊してゐる」だけだと痛烈に批判していた(石川, 1967, pp.240-244)。だがその石川も晩年の明治 45 (1912) 年 1 月の作品「病室より」では、因習と習慣に縛られた自分自身の病身にそくして、観念的で目的のない再帰的な破壊願望(=自身からの「脱」)を書きつけているのである(同, p.371)。

もちろん、こうした諸言表は「自分」の語の文学的な導入・定着に較べるとはるかにマイナーな現象ではあった。しかしそれは小さな傍流ながらも命脈を保ち、文学者の表現において細々と飛び石のように続いていき、結果的に近代的批評の礎石にも合流していく。

先述した漱石の言表は創作上の好例だが、小説家の里見弴も自伝的私小説「善心悪心」(大正 5 年)で「成程かういふつもりだね。……さういふ俺は？ やつぱりかうなるつもりか。フン」と、自分で自分を嘲つてゐた。」(里見, 1951, p.19)と書きつけた。文学作品上の再帰的批判はこうした自身への嫌悪や嘲笑にかぎらない。同じ大正 5 (1916) 年発表の「貧しき人々の群れ」で、小説家の中条百合子(後の宮本百合子)は次のように書く。

それでも、ただ一つのことを、私を慰め力づけてくれたのである。それは、私が初めて自分の思っていた通りに自分を処置することが出来たということだ。

私は怒りっぽい。じきに腹を立てる性分である。それ故このごろでは、どうかして余り

怒りたくない、寛容な心持でいたいとどのくらい願っているか知れない。……それを今度は殆ど怒りを感じないで済んだということは、ほんとに嬉しかった。(宮本, 1985, p.365)

重要なのはここで「自分を処置する」という表現が使われている点だ。たしかにこの言表は自分を「脱」の対象としたものではなく、漱石や里見のようには自身をそれほど突き放してもない。だが文脈からもわかるように、主人公は自身の「性分」を批判的に捉えており、それを再帰的にコントロールできたことが「ほんとに嬉しかった」のである。

こんどは小説家の広津和郎による自己批判的な私小説「師崎行」(大正7年)をみる。広津は「自分」の語をつうじてさらに自分を突き放すような対象化をおこなった。

が、私は少し冷静になると、手切金と云うようなもので片のついて行く此の世の中の出鱈目な制度に、今更のような驚きを覚え出した。私はそれを利用しようとすれば、直ぐにも利用出来ると云う事が、恐ろしくなって来た。みつ子やみつ子の母を世間の前例によって瞞着しようとすれば、私は瞞着出来るのだ。私はそういう立場にいる自分の位置を考えると、丁度深淵の直ぐ前に立っている自分を見出しでもしたように、急に自分に対して警戒を要求する恐怖に捉えられた。「ほんとにあぶない、うっかりすると」こんな風に私はぞつとしながら自分の心を見まもった。(広津, 1973, p.179. 傍点は引用文)

引用文にもあるとおり、この小説での「自分」の語は「自分の心」を指すとみてよい(同, p.122, p.132, p.137)。観念的な否定の徹底という点ではまだ弱いものの、上の言表からわかるように広津はこの語で自分の中身を批判的对象と捉えてはいた。

関東大震災(大正12年)の2年後に発表されたアナキスト評論家・新居格による「無価値の狂想」(大正14年)というエッセイになると、自身への観念的な否定が徹底されている。新居は「存在なんてわづらわしい丈だ」と述べ、自身の「存在」が全体的に消失していく状態を欲した。

黒い深夜である。私は寢床に横たわっていた。神経だけは冴え切っているが、四肢も胴体も——薄氷の解ける様に——無限に続く闇のなかに解けて行っただのではないかとさえ思われた。ただ一つ取り残されて冬の夜の明星のように冴えた思惟の作用。それもやがて消えるような気がした。

完全な解体である。しかし、ニヒリストの自分に取っては心細いことでも、さびしいことでもなかった。自分と云うものの全存在が極めてしづかに、何の音もしず^{ママ}に闇のなかに解けてしまうことがどんなに望ましいか知れないのであった。(新居, 1975, pp.107-108)

静寂感ある凜とした文章のなか、新居は徹底して「自分と云うものの全存在」を否定対象にしている。「闇のなかに解けてしまう」という表現からもわかるように、新居にとっては必然的に自身の個的なありかた（＝形式）までが観念的な否定対象となっている。文脈上の解釈を待たずとも、自分は直接的に「脱」の対象として表現されている。

さらに、ダダイスト作家の辻潤による昭和初期ごろの言表をみよう。辻の場合、身体的・精神的な中身のみならず、自分に個的な形式があることにもそうとう自覚的であり、自身への再帰的批判はかなり強烈で徹底的だった。「萩原朔太郎の手紙」（執筆年不明、おそらく昭和5～6年前後か）というエッセイで辻は次のように書く。

私の頭やからだの中には色々な滓が一杯たまっている。何億万年とも知れない間に自分と云う人間の中に遺伝されているさまざまな血、即ち細胞の集積が……。

私はそれを全部吐き出してしまいたいのである。どんな滓みtainなものでも、一切合サイ排泄することが出来たら、どんなに気持ちがいいだろうと思う。そうするには自分と云うものを出来るだけ深く察して、蛆上に載せ残酷な解剖を試みなければならないと思う。（大沢編，1975，p.222）。

これに近い時期、新心理主義文学の新しい小説家だった伊藤整も、「生物祭」（昭和7年）という作品で「私は私自身からすら飛び去りたいのに。」と主人公における自身からの「脱」の欲望を直接的に表現した（伊藤，1972，p.404）。この作品は、父の危篤により帰郷した主人公が父への嫌悪を意識していく過程を描いた。比喩的にはあるが、主人公がそのなかで衝動的に自分を否定する言表がある。意識の流れを表現する独特の手法によって、伊藤は観念的な再帰的否定にも具体的なリアリティを与えた。

そして死にかけている父の喉の傷をぞくりと自分の手で引っ掻いたように私は飛び上りたい衝動に駆られ、喋っている自分を踏みつけて踏み潰して、地の中にめり込ませたくなった。そして私に答えようとしない母の沈黙は、惨めに投げ出された私の醜さに対する思い切った残酷さで、いつまでも続けられた。（同，p.402）

そして同年の昭和7（1932）年には、フランス文学に影響をうけて西欧近代社会に特有の自意識の手法を採った批評家・小林秀雄の次のような言表が文壇に登場する。

自分の本当の姿が見附けたかつたら、自分といふものを一切見失ふまで、自己解析をつづける事。途中で止めるなら、初めからしない方が有益である。途中で見附ける自分の姿はみんな影に過ぎない（小林，2001a，p.295）。

この「手帖Ⅰ」という小品では、「定かな性格を全く持つてゐない」自分とは違った「めいめい確固たる性格」である他人を見出し、それを鏡として自分を映す（＝「本当の姿」）ということに主眼が置かれている。しかしここで自分は一定以上の質的な中身をもちつつ、再帰的な「脱」の批判対象（＝「影」）にもなっていることが十分に読みとれる。この批判の徹底性は「自分といふものを一切見失ふまで」という表現に現れている。小林は同年の「Xへの手紙」でも「もう十分に自分は壊れて了つてゐる」としたうえで、「俺が自分の言動とほんたうの自分とのつながりに、なんと知れぬ暗礁を感じはじめてから既に久しい」（同、p.263）と書いた。ここでの「本当／ほんたうの自分」はなんらかの具体的な同一化対象や確固たる自身の中核を安直に指すものではない。むしろ焦点は「本当／ほんたうの自分」を探るための批判的な「自己解析」のほうにあり、それを徹底することがいかに厳しく困難な作業であるかを語っている。そして、それは「影」ばかりの自分を見失わせたり壊したりしてしまうものだった¹⁵⁾。

また、小林とともに日本の近代的批評を作りあげた河上徹太郎は、昭和8（1933）年に小説家の横光利一の作品「花花」を評した。この小説で横光は「自分の個人的な明確な心象に憑かれてゐる」だけのような従来の私小説とは異なる新しい私小説観をうちだした。そこでは「自分自身を征服する意図極めて顕著で、それが抽象的な迄に現れてゐる」。河上の考えでは、「芸術精進」のために自分を「脱け出さう／離脱しよう」とする横光の「努力」や「アスピレーション」は、従来の日本の私小説作家たちにほとんどみられないものだった。

或る作家がある人物をうまく描かうとする心遣ひの中には、自分がその人物から脱け出さうとする努力よりは自分自身から脱け出さうといふ努力の方が必ず多くあるのである。すべてこれらの現象に共通して、芸術精進の中には自分自身から離脱しようといふアスピレーションが強力な潜勢力をなしてゐるのが肯定される。（河上、1969、p.107）¹⁶⁾

小林や河上がおこなったように、自分からの「脱」という問題は昭和前期の文芸批評において1つの直接的なテーマとなっていく。作家たちの個人的なその場限りでの言表を超え、自分からの「脱」という問題が一般的な次元で批評的に捉えられるようになったのである。

以上、「自分」の語を用いた再帰的な懷疑・否定の文学的事例をみてきた。たしかにそれぞれの言表の文脈は全く異なる。懷疑・否定の徹底性やそれにともなう感情の質や強さもそれぞれ異なる。だが少なくとも自分のself化が進んでいった明治後末期から昭和初期までの文学的表現において、self的な自分への再帰的な懷疑・否定もある程度まで質的に成熟してきたことがわかる。本節の具体的諸事例は、それぞれ突然登場した作家の特異な個別的才能や宗教的感受性などに還元される事態というよりも、この時期の歴史的・社会的・文化的な背景のもとにあった象徴的な事態だと考えられる。

8. 文化的自己観としての自分と、近現代日本社会における自分のありかた

前2節では近代日本の文学的事例に拠りながら自分をめぐる表現の変容をみた。日本の近代文学には、外的な他人や世間を描いていた小説が再帰的な内的叙述である「告白」としげんに重なった点で、独特の面があるといわれる。だが告白という実践は西洋キリスト教によって明治期の知識人層にもたらされた。ルソー『懺悔録（告白）』（森鷗外訳、明治24年）やトルストイ『我懺悔』（加藤直士訳、明治35年）などとともに、ルナン『耶蘇（イエス伝）』（網嶋梁川訳、明治33-34年）が当時の文学青年に愛読された。キリスト教的社会運動家だった木下尚江なども、トルストイに刺激されて懷疑と煩悶の半生を自伝的に告白する『懺悔』（明治39年）を書いた。近代仏教としての浄土真宗の近角常観『懺悔録』（明治37年）や清沢満之『懺悔録』（暁烏敏編、明治39年）などを含め、告白文学はとくに日露戦争後には一種の流行の趣さえあった（[久山編, 1956, pp.147-148] [木下, 1965, pp.257-309, p.387] [秋山, 2006, p.68, p.71]）。キリスト教に由来する表象行為が近代的な自我意識とともに文学をつうじて認知・摂取されていくことと、「自分」の語をともなう近代小説の変容とは、再帰性を共通点にしておおむね同時期に進行した現象といってよい。

だとすれば、自分のself化が進んだ近代日本社会で、西欧近代的なselfと自分とは一致したことになるのだろうか。なるほどselfは普遍のものともみなされやすい。だが「self」や「自分」の語はその担い手特有の文化的・社会的なありかたを言い表す面ももつ。そこには当該社会の歴史的な文脈も作用している。文化心理学者の北山忍は「ある文化において歴史的に作りだされ、暗黙の内に共有されている人の主体の性質についての通念」を文化的自己観と呼んだ（北山, 1998, pp.29-37, p.105）。ミード以来の社会的自我の概念も、じつは欧米の社会的・歴史的な文脈を色濃く反映した文化的自己観である。「I」や「me」といった用語の背景には、「自発的で自由意思をもつ個人」と「保守的で規範的な公的空間における個人」との交渉・葛藤を当然視する世界がある（井出, 2017, p.187）。

第6節で、「self」と「自分」は語用において原理的に異なる点があるままに、名詞としての概念が重なっていったと述べた。文化的自己観としての近代的な自分概念にもself概念と異なる性質があるとすれば、それはどういうものか。ここでは、それを語義にそくして思想的・思想史的に論じた代表的な先行研究のもと、本稿の問題関心にもとづく重要なポイントを取り上げ、ごく簡単にみておきたい。

まず自分を「分」の面からみよう。精神病理学者の木村敏はそこに思想的意義づけをおこない、宇宙的生命が一個の生命体に分有されていることを自分に含めた。自分は恒常的な同一性というよりも、自身を越えた何かからの「そのつど」の分け前である。日常的現実の次元では、自身と相手との間にそのつど具体的に見いだされ、そこから獲得されてくるもの／ことが自分である。だから自身を捨てて他人のために尽くす人にもそれなりの自分を認めうる（[木村,

1972, p.154] [木村, 2008, p.67])。このように自分は自他・主客の曖昧さを内包しながら個性をもつ。その点で閉じた個性が前提となる self 概念とは異なる。

たしかに、自分も self も社会的な意味秩序の領域にある。それらは社会的制度のもと、シンボルやイメージによって個的な統合性をもつように分節化される。制度による意味秩序も盤石ではないので裂け目もあり、ひとの生は常にそこから洩れ落ちる可能性がある。音楽やスポーツの体験が典型的だが、社会的な意味秩序の網の目から洩れ落ちたとき、ひとは豊かな生命感をともなう〈リアル〉な生成的次元に触れうる(岡崎, 2020, pp.30-33。〈 〉表記は岡崎のもの)。だが木村の述べる通りなら、自分はもとよりその次元に開かれている面があり、触れやすい。self は閉じて独立しているぶん、何らかの強烈な‘壊れ’を経験せずには生成的次元に触れにくい。むしろ具体的な個々人においては一律にいえないだろうが、少なくとも2語の概念からはそういえる。

つぎに「自」の面をみよう。「自」の漢字は鼻の形にかたどった象形文字である。字源としては鼻を指して自身を強調する意思表示をしたことに由来するとされる。したがって再帰的な機能を担うが、この字には日本の思想的・文化的問題もある。「自」は「みずから」とも「おのずから」とも読まれる。一見すると、主体的・意識的に為す「みずから」と自発的・受動的に成る「おのずから」とは正反対だ。しかし両者は分離していない。日本思想史学者の竹内整一はこの点を指摘し、中世以来の日本思想が両者の相即をうたいつつもその不可能性を自覚的に抱えてきたことを論じる。思想や芸事などでいくら主客の一体・相即を理想的に追求しても、「みずから」「おのずから」の「あわい」(＝間^{あいだ})は現実にはそうそう消去できない。それはほかならぬ近代日本文学で深刻に露呈した。明治・大正期の自然主義私小説群では、「私」を主観＝客観という安直な無媒介的図式で描けば「あわい」の問題を簡単に解決できると思い込んだ結果、閉じて硬直した文壇的言説しか生めなかった面がある(竹内, 2004, pp.12-14, p.23, p.49)。

だとすると、少なくとも文学をはじめとした思想的・文化的な面でこうした「あわい」を消し去れない以上、近代日本文学を媒介として進んできた自分の self 化も本当は徹底されず、どこかで歯止めがかかることになる。竹内の論に従うと、自分概念を捉える場合には「あわい」の思想的な自覚が必要となる。個人化が進んできた現代日本社会でも「あわい」の問題は残っていると考えられるので、この思想的な自覚は現代でも同様に必要となろう。

「自」はこういった「おのずから」「みずから」という読みから‘自身’(おの・み)の意に着目されることが多い。だが別の観点もある。それは、「自」の漢字がもともと発端・起源も意味することだ。赤ん坊が母体から出てくるときに鼻のほうから姿を現すことが由来とされる。よく知られるように「自」の訓も「より・から」だ。先の木村は過剰解釈の可能性を断ったうえで、「おのずから」「みずから」が「自」で表記されたのは語尾の「から」が含意する発生・起源に着目したためではないかという見解を示す。これに対してドイツ語の「Selbst」や英語の「self」は発生・起源といった変容の意を含まず、あくまでも固定的な同一性を前提とする(木

村, 2008, pp.29-31)。つまり「自」は何らかの発生・変容の事態を捉えたものであり、いわば触発の契機を示している。

以上、本稿での論点にもふれながら、代表的な先行研究の概要を示した。現時点で、本稿はこれら思想的・思想史的な諸研究の見解について、その根本的な成否を判断する材料をもたない。たしかに、「自」「分」それぞれの語義と自分のありかたをどこまで一致させるかという問題もある。木村の論では、それぞれの語義が歴史的に一貫している印象さえ与える。また担い手の身分階級や社会階層の違いについて考慮が不十分である可能性もある。しかし、碩学たちによるこれらの諸研究が自分をめぐる重要な思想的議論の端緒を開いたことも事実だ。ここではその基本的見解をいったん前提としたうえで、前節までの論述もふまえ、さしあたり以下のように考察を進めてみたい。

自分というありかたは、近代的な社会制度のもと、selfのような連続した個的な統合性をもつように分節化されてきた。現実には文化的自己観と相容れない人がいくらでもいるとはいえ、人びとは総じて当該社会の文化的自己観にも影響をうけている。このために自分のありかたはselfと異なる性質をもつと考えられる。実際に、自分においては外部からの受動性と内的な能動性とが一致も分離もせずにな重なっている。個別性に閉じ切らずに、また形式的な標準性にも回収されずに、物理的・社会的な環境とのやりとりのなかで触発され、行為をする具体的な身体においてそのつど個的に意味が獲得されるという事態が、おそらくは自分の要である。

近代日本社会の自分については、あくまでもこの関係的な事態が損なわれない程度において、連続した個的な統合性が成り立っているのではないか。1つの事例にすぎないが、次に示す戦後昭和期の作家である阿部昭の言表なども、こうした文化的自己観としての自分の事情を表現行為の観点から見事に捉えたものと思われる（なお、この引用部で阿部が言う「意味」はもちろん上記の個的に獲得される意味のことではない）。

「自分を表現する」ということは、ふつう、なんとなく「自分」という薄暗がりのような漠々とした部分がどこかにあって、それをレントゲン写真か何かのようにそのまま透視してみせることのように思われている。だが、これも、まったく逆のことで、私どもは自分が形をあたえてやるもの、一本の木とか一人の女とかいった自分以外のものに自分の言葉を託すことによってしか「自分」というものを表せないのである。それが、書くということの意味なのだと思う。（阿部, 1981, p.18）

ここで、第6節で得られた知見を組み込んでみよう。書き手が「自分」の語のもとで自身の意識・思考を自己完結的に表現したとき、その意味内容は近代日本社会におけるself的な標準化を受けた書き手自身の個的な形式にそって呼び込まれていた。そこでは連続した個的な統合性がたしかに成立する。そして個的な身体が物理的・社会的な環境とやりとりする事態のうち

に、意味も獲得され、解釈される。こうしたことから、自分における中身の意味的な諸要素やそれらの連関だけが自分と環境との相互行為に応じて変化・多様化する、と私たちは思ってしまうやすい。

ところが先ほどみたとおり、近代日本社会の自分において self 的な標準化は徹底されずにどこかで歯止めがかかってしまった。そうすると自分という個的な形式は固定的な同一性に到達しきらないことになる。先述した自分における関係的な事態の重要性や self 的な標準化への過程段階を考えあわせると、そこにはグラデーションがある¹⁷⁾。

だとすれば、近代日本社会における自分のありかたには、意味的な‘中身’の多様性のみならず、それらを取り囲んでいるような‘形式’にも多元性があることになる。ここで多元性というのは、近代小説の文体・視点の推移に表れた self 的な標準化の過程を考えればわかるように、お互いに矛盾さえする複数の形式が同時に成り立っていたりそれぞれ変容したりすると考えられるからである。したがって「脱」の対象としての自分も、なかなか一口では示せないことになる。前節では自分からの「脱」となっていく諸言表例を時代の流れのもとに確認したが、実際にもそこには質的な変容・成熟がみられた。

以上の考察は社会学的には次のように進めることができる。社会学の諸研究が示すように、現代社会では個人化が高度に進んでいる。そうすると自分における意味的な中身の多様化はいつそう認められよう。それとともに、個的に局所化した自分の具体的な宿り場である身体も含め、自分の形式が複雑に多元化しつつ、一方では社会の心理主義化をつうじた新たな標準化も大いに受けていると考えられる。そうした自分の形式は、おそらくそれぞれが（ときには重層的に）一定の社会的広がりをもって人びとに共有されていると推察される¹⁸⁾。

9. 結論

本稿の目的は、あくまでも、社会学的な「脱・自分」論の対象を分類・整理するための認識枠組みを具体的に提示することにあった。本稿では用語の問題を手がかりに議論してきた。むしろ現時点での筆者の限界として、議論の過程で推察にとどまった部分も多くある。しかし前節までの議論からは、以下の理論的仮説を導出することができる。

日本社会において、「自分」の語を用いた再帰的で自己完結的な内的表象が十分に可能となったのは、おおむね明治後末期以降である。この時期には、個的な形式を備えた自分が文章表現での意味内容にもとづく中身を獲得していた。また、文章表現で自分が再帰的な「脱」の対象となることも可能になっていった。文学者を中心とする知的な社会階層においてではあったが、これら2つは明治後末期から昭和初期にかけて一定の質的な成熟がみられた。

と同時に、自分は近代日本社会特有の複雑さも抱えてきた。自分の形式は社会的に局所化してある程度まで一般化＝標準化されているものの、固定的な同一性には達しないまま個別性に

も閉じきらない状態にあると考えられる。この点は現代でもおそらくある程度まで同様だろう。より抽象化していえば、中身のみならず形式の面でも、自分のありかたには当該の歴史的・社会的・文化的状況が大きな影響を与えており、社会構造も反映した特有の社会的関係性が深く浸透してきた。それをつうじて、自分は意味内容にもとづく多様な中身をもちうる。また中身を取り囲む自分の形式にも多元性が生じうる。中身は個的な形式にそって呼び込まれるので、当然ながら中身と形式のあいだにも相互作用や影響関係がある。

こうした複雑な自分のどの面に着眼するかで、再帰的な「脱・自分」のありかたは異なってくる。このことは、「脱・自分」の具体的事例が種々にわたることの根本的な要因となる。「脱・自分」を包括的に捉えつつ考察や議論を混乱させないようにするには、対象を分類・整理するための枠組み作りが有効である。

本稿での議論にもとづき、中身と形式の観点を分けながら抽象度を上げつつ順を追って考えていくと、近現代社会での「脱・自分」にはさしあたり次のパターンとその組み合わせを想定できるのではないか。

- (1) 自身の精神や身体における意味的な‘中身’からの「脱」。
- (2) 自身の精神や身体に影響・浸透している社会的関係性からの「脱」。
- (3) 自身の精神や身体が物理的・社会的な環境に埋め込まれていることからの「脱」。
- (4) 自身の精神や身体が具体的に存在していることじたいからの「脱」
- (5) 自分における精神的あるいは身体的な‘形式’の標準化（の過程段階）からの「脱」。
- (6) 自分において標準化された精神的あるいは身体的な‘形式’からの「脱」。

これが「脱・自分」論の対象を分類・整理するための認識枠組みである。(1)は本稿でいう中身に直接関わり、(1)から(4)にかけて順に抽象度が上がる。(5)(6)は本稿でいう形式に直接関わる。ここでは中身の問題よりも抽象度が高い‘形式からの「脱」’を後ろにおいた。なお、(1)～(4)はある程度まで自覚的に追求されうるのに対し、(5)(6)は自覚的に追求されることがきわめて少ないと考えられる。(5)(6)はむしろ(1)～(4)の具体的事例を社会学的に考察・分析するなかで浮上する。

自分概念のもつ含みにより、当然ながら現実には(1)～(6)の複数のパターンが越境的に混じる。あくまでも入口としてだけなら、本稿冒頭部での大学生の例は(1)が強く、勢古の例は(2)が強いと考えられる。「死にたいより消えたい」の例は(3)か(4)が強いだろう。また社会学的な脱アイデンティティ論の展望では(1)を含みつつも(2)が強い。音楽やスポーツの体験を通して忘我的・自失的に〈リアル〉な生成的次元に触れることを含めるなら、それへの欲望を(3)とみることもできる。(4)は新居の例などが典型的である。

いっぽう、(5)は明治後末期や大正期の一部の文学者に見出される（鍵本、2017）。(6)は近現代日本社会でどう可能なかという問いを呼ぶものだろう¹⁹⁾。もしかすると(5)や(6)への欲望は、衝撃的な形式の‘壊れ’を経験したりその形式が溶解する忘我的・自失的な体験をしたりするなかで生じる可能性もある。それを經由して(3)や(4)への欲望が呼びおこされる可能性もあろう。

現時点ではまだ仮説段階にとどまるものとはいえ、以上のような近現代社会の「脱・自分」の様相とそのパターンをある程度整理しつつ提示しえたことで、本稿の目的はひとまず達された。パターンの組み合わせの類型を具体的に論じることは今後の課題である。

社会学にとって、本稿の議論が上記の(5)(6)とその区別を理論的に指摘しえたことは重要だと思われる。それは再帰性についての新たな理論的知見を社会学にもたらしうる。最後にこの点について簡単に述べたい。

社会学が論じてきたとおり、たしかに現代社会ではさまざまな領域で個人における再帰性が高まっている。ソーシャルメディアや美容・健康の領域が典型的であるように、さまざまな他人たちとの関係性のなかで人びとは自身のイメージや身体や心理や表現への再帰的なコントロールを複雑かつ微細なかたちでおこなうようになっている。自身の行為への再帰的な認識・反省も常になされる。こうした再帰性は当然ながら自身をめぐる意味解釈を増大させるが、その結果として多様でありながら微細でもある膨大な量の意味解釈を社会全体に氾濫させている。私たちはこうした問題やその具体的事例ばかりに眼を奪われやすい。

しかしながら人びとが自身を捉える／捉え直す再帰性には、そういった多様な意味内容以前に、本当はそれらの意味内容を取り囲んだり成り立たせたりしている形式が多元的にかかわっているはずである。諸形式はそれぞれに変容してグラデーションも示しうるだろう。本稿の議論にそくしていうなら、‘閉じて標準化されたselfにおける行為・認識の再帰性’と‘self化していきつつもselfのように閉じ切らない状態にある自分の行為・認識の再帰性’とを全く同じものと捉えることに、どこか陥穽はないだろうか。たんに自身を省みるという点ではむしろ両者とも同じだ。しかし少なくともそれらの果たす機能や様相などに関して、両者は根本的に異なってくると思われる。管見のかぎりでは、これまで社会学がselfの再帰性を論じるさいに、こういった諸形式それぞれの再帰性の機能・様相などの違いを理論的に見出そうとする傾向はあまりなかったように思われる。selfの内容と形式を分けるのは安直だとみる向きもあろうが、諸形式の差異の問題のほうに関心が払われなくなったのなら、それはそれで議論を深める機会を自ら減らしているのではないだろうか。

こうした理論的知見が有効に生かされるなら、今後は自身をめぐる再帰的現象を社会的に考察するとき、そこで生じている意味内容だけでなく、自分の多面的な形式やそれらのグラデーションにも具体的に着眼できるのではないかと期待される。事例研究においては意味内容と形式の相互作用や影響関係にも考察が及ぶだろう。そうした具体的な考察の結果から、たたき台としての本稿の理論的仮説や認識枠組みは検証・修正されていくはずである。

註

- 1) 心理学分野には「脱・自分」を展望しうる議論がある。青年心理学者の中間玲子は、自尊感情を高めることを当然視する社会では「自己への評価的視点からの解放」や「自己意識そのものからの自由」といった観点が失われると指摘した（中間，2016）。社会心理学者ロイ・F・バウマイスターは人生のあらゆる問題をselfの問題としてしまう現代西洋社会を考察し、重荷になった selfhood の範囲をわざと狭くする身体的実践によって、人びとが自己意識から逃げ出そうとしていると指摘した（Baumeister, 1997）。
- 2) 次節以降、語を示す場合は「 」をつけて表記し、概念を示す場合はそのまま表記する。また、参照元を示さない語の説明は以下に拠る。森田良行『基礎日本語 2——意味と使い方』（角川書店, 1970）、『補訂版 岩波古語辞典』（岩波書店, 1990）、『角川新字源 改訂版』（角川学芸出版, 1994）、『新版増補版 社会学小辞典』（有斐閣, 2005）、『日本語源大辞典』（小学館, 2005）、『精選版 日本国語大辞典』（小学館, 2006）。
- 3) 実際に、「自己無化」「自己解体」の語での議論は考察範囲を狭めていた可能性があった（[鍵本, 2006] [鍵本, 2009]）。なおサルトルは「脱自的な ek-statique de soi」ありようも論じている（Sartre, 1943 = 2007, p.344）が、哲学者の柴田健志によると、選択行為における脱自には意識の消失が瞬間的に訪れている（柴田, 2015）。この論はきわめて示唆的である。
- 4) この二重性は近代的個人の概念でもほぼ同様である（Ferguson, 2009, pp.24-25）。また社会学者ゲオルク・ジンメルによる、個性の個人主義（19世紀に典型的な質的＝ロマン主義的個人主義）／理性の個人主義（18世紀に典型的な量的＝啓蒙主義的個人主義）という指摘にもあたる（[Simmel, 1917 = 1979] [池田, 1988]）。
- 5) 構築主義的社会学では「主体」に替えて「エイジェンシー agency」の語がときに使われる。それは動的な社会構造のもと、言説実践の場で生じる作用を捉えようとする概念である。
- 6) 自己意識研究では「脱アイデンティティ」の語が先駆的に使われた（梶田, 1998, p.171）が、それは社会学の脱アイデンティティ論と異なる。
- 7) 他の例でいえば、19世紀後半の西欧やアメリカでは、キリスト教的な魂（soul）の問題を聖職者や哲学者から批判的に解放し、複数に分裂したselfを世俗での自然な統一体に戻して「正常化 normalization」しようとする病理学・心理学が登場した（Danziger, 1997a, pp.147-148）。
- 8) self と自分の違いについては、第8節であらためて述べる。
- 9) 興味深いことに、英語の-self形などと異なり、再帰的用法の「自分」は自身の身体を突き放して対象化するときにはしか使えない。たとえば、「太郎は椅子に腰をおろした。」などにおいて「腰」の代わりに「自分」は用いられない（[廣瀬・加賀, 1997, p.82] [Noguchi, 2015, pp.56-57]）。
- 10) これも推察にとどまるが、本稿冒頭部で述べた「自分というものを持っている」などの「自分」が「自分自身」という語に置き換えられないのは、「自身」という語が入ると自身を突き放すような表現効果に抵触するからではないか。また同様に、「自分がない」という表現が内的な機能失調を指しうるのは、「自分」の語用における個人的な思考・意識の自己完結性と大きく関連するのではないか。
- 11) 言語文化研究者の金晶は、日本語の「自分」と中国語の「自己」を比較しつつ、一人称用法のない後者の語が成立過程で内的自己の性質を含まなかったことを指摘している（金, 2014, pp.33-37）。
- 12) 日本語学者の木川行央は、一人称の「自分」が軍隊用語として定着したのはおおよそ大正時代だとみる。木川はその大きな一因に、日露戦争後の軍隊組織の刷新があると推察する。そこで対人関係性に依存しない一人称「自分」が定着していった（木川, 2011, p.56, p.61）。
- 13) 志賀直哉の日記には明治37（1904）年から「自分」の用例が見られる。客観性への志向が強かった志賀においては、小説の物語内容がその実生活を取り扱った結果、自分小説が生まれた（下岡, 2016, pp.4-5, p.10）。
- 14) 作家の若松賤子も翻訳『小公子』（明治23-25年）で、無人称の語り手が三人称の登場人物たちの視

点に入り込んだときに「自分」の語を用いた（後藤，2002，pp.36-44）。日本文学研究者の谷川恵一によると、これらの文学的源流は、坪内逍遙が明治17年のシェイクスピア翻訳『自由太刀余波鋭鋒』で導入した、登場人物のセリフ内容が読者に嘘だとわからせながらも真実に似せかけるための表現上の工夫としての一人称代名詞「自分」にある（谷川，2008，pp.177-185）。

- 15) 実際にも小林は、批評という仕事において「第一僕は自己証明などといつても、すでに、確乎たる自己を見失はざるを得ないやうな状態にある自己の証明を強ひられて来たのだ」という（小林，2001c，p.84）。昭和11年に書かれたこの引用文では先の箇所と違って「自分」の語こそ使われていないものの、小林がその自意識において自身のselfを近代文学的に追求するさい、徹底的な再帰的懐疑のもとでそれを逆説的に捉えかえしていたことは明らかである。
- 16) ここで河上は「脱」の対象語に「自分自身」を用いている。これは現代の言表例を念頭においた註10)での推察と矛盾する。おそらくは過渡的な事例だと考えられるが、今後の課題としたい。
- 17) 「自分」の語をキーワードにしてはいないものの、このことを示す非常に象徴的な例がある。昭和10（1935）年発表の「私小説論」で、小林秀雄が西欧から輸入されたマルクス主義思想などをうけとめて「社会化した「私」」を論じたことはよく知られている。それは実生活に膠着して自身の感情を吐露するばかりの日本の私小説家たちの「私」に「文学自体に外から生き物の様に働きかける社会化され組織化された思想の力といふ様なもの」への視点や認識が欠落している点を批判した論考だった（小林，2001b，p.381，pp.384-385）。このときの小林の理想は（近代）社会との対決において「私」としての個人（および「他人」たち）を捉える西欧近代の標準化されたself概念に重なるものだったといえよう。実際に、昭和11（1936）年発表の「中野重治君へ」ではこうした「社会化した「私」」が「社会化した自己」と言い換えられている（小林，2001c，p.84）。小林は、そうした「自己」＝「私」が19世紀の実証主義的科学の発達によって生み出された資本主義社会の産物であり、解体した人間性を再建するために「個性をもった自意識」として必要とされたものと捉えていた。その後、小林は西欧近代文学をもとに「社会化した「私」」という作家像を自身の批評方法として作り上げていく（飛矢崎，2017，pp.197-198，p.207）。だがそうした作家像も、日本語学・日本文学研究者の坂田達紀の指摘によると、実際にはすでに「社会化した」というよりも「思想の高みに上ることを目指した、社会化しつつある「私」」にほかならなかった（坂田，2008，p.477。傍点引用文）。さらに政治思想史研究者の橋川文三によれば、小林は当時のプロレタリア文学運動の挫折と解体をうけた自身の自己解析的な方法の挫折こそを認識しており、「私小説論」はむしろ日本の文壇で「社会化した私」の実現が結局不可能だという告白とみるべきである（橋川，1998，pp.143-144）。つまり、いわゆる日本での「近代的自我」は「社会化しつつある」ものとしての「私」＝「自己」であり、それはself的な標準化の過程段階のどこかに位置づけられるものだった。ただし、本稿はそれを安直に「日本社会における近代的自我の未成熟」といったような価値判断には還元しない。
- 18) 現代日本社会では対他関係をもとにした複数的な「自分らしさ」が成り立つとともに、じつは西欧由来の一元的中核の発現を「自分らしさ」と捉える余地もまだ充分にある。両面のバランスや葛藤も重要な論点である（時岡，2018，pp.93-94）。だとすると、ある意味では複数の形式が個人レベルで多元的に共存する可能性もある。
- 19) selfからの「脱」という問題については先述したバウマイスターの論があるが、本稿の筆者も現代日本社会の具体的事例にそくして議論することを今後の課題としたい。

引用文献

- 阿部昭（1981）『散文の基本』福武書店。
 秋山駿（2006）『私小説という人生』新潮社。
 芥川龍之介（1996）『芥川龍之介全集 第4巻』岩波書店。
 荒木田岳（2020）『村の日本近代史』ちくま新書。

- 浅野智彦 (2016) 「流動的社会の中のアイデンティティ」 梶田叡一・中間玲子・佐藤徳編『現代社会の中の自己・アイデンティティ』金子書房, pp.86-105.
- Bauman, Zygmunt (2009) "Identity in a Globalizing World", Anthony Elliott and Paul du Gay (eds.) *Identity in Question*, Sage, pp.1-12.
- Baumeister, Roy F. (1997) "The Self and Society: Changes, Problems, and Opportunities", Richard D. Ashmore and Lee Jussim (eds.) *Self and Identity: Fundamental Issues*, Oxford University Press, Inc, pp.191-217.
- Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall. (= 後藤将之訳 (1991) 『シンボリック相互作用論——パースペクティブと方法』 勁草書房.)
- Burke, Peter J. and Jan E. Stets (2009) *Identity Theory*, Oxford University Press.
- Butler, Judith (1997) *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford University Press. (= 佐藤嘉幸・清水知子訳 (2012) 『権力の心的な生——主体化=服従化に関する諸理論』 月曜社.)
- Danziger, Kurt (1997a) "The Historical Formation of Selves", Richard D. Ashmore and Lee Jussim (eds.) *Self and Identity: Fundamental Issues*, Oxford University Press, pp.137-159.
- Danziger, Kurt (1997b) *Naming the Mind: How Psychology Found its Language*, Sage. (= 河野哲也監訳 (2005) 『心を名づけること 上・下——心理学の社会的構成』 勁草書房.)
- Durkheim, Émile (1960) *De la division du travail social: Étude sur l'organisation des sociétés supérieures*, 7^e édition, P.U.F. (= 田原音和訳 (2017) 『社会分業論』 ちくま学芸文庫.)
- Elliott, Anthony (2014) *Concepts of the Self*, 3rd edition, Polity.
- Elliott, Anthony (2016) *Identity Troubles: An Introduction*, Routledge.
- 遠藤好英 (1972) 「白樺派の文章史的考察 (上) ——自分小説の創始をめぐる」『文芸研究』 (70), pp.48-58.
- 遠藤好英 (1975) 「自分小説の系譜とその文体——二葉亭以後, 明治 40 年まで」『文芸研究』 (80), pp.48-59.
- 遠藤好英 (1983) 「じぶん (自分)」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 第 10 巻 語誌Ⅱ』明治書院, pp.185-192.
- 榎本博明編 (2011) 『自己心理学の最先端——自己の構造と機能を科学する』 あいり出版.
- Ferguson, Harvie (2009) *Self-identity and Everyday Life*, Routledge.
- Freud, Sigmund (1924) "Ich und das Es", *Gesammelte Werke*, XIII, Imago Publishing Co., Ltd. 1940, Zehnte Auflage, S. Fischer, 1998, S.237-289. (= 本間直樹訳 (2007) 「自我とエス」『フロイト全集 18』 岩波書店, pp.1-62.)
- 藤井正 (1986) 「「自分」について」松村明教授古希記念会編『国語研究論集』明治書院, pp.625-640.
- 福武直 (1987) 『日本社会の構造 第 2 版』東京大学出版会.
- Giddens, Anthony (1991) *Modernity and Self Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity. (= 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳 (2005) 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』 ハーベスト社.)
- 後藤康二 (1988) 「《自分》という語り手と物語——独歩「運命論者」の場合」『日本文学』第 37 巻 1 号, pp.45-56.
- 後藤康二 (2002) 「「自分」再考」『水脈』川上美那子先生退職記念論文集刊行会, pp.35-52.
- Hall, Stuart and Paul du Gay (eds.) (1996) *The Question of Cultural Identity*, Sage. (= 林完江ほか訳 (2000) 『カルチュラル・アイデンティティの諸問題——誰がアイデンティティを必要とするのか』 大村書店.)
- 班固／小竹武夫訳 (1998) 『漢書 5 列伝Ⅱ』ちくま学芸文庫.
- 葉山嘉樹 (2021) 「淫売婦」道旗泰三編『葉山嘉樹短篇集』岩波文庫, pp.13-40.
- 日比嘉高 (2002) 『〈自己表象〉の文学史——自分を書く小説の登場』翰林書房.

- 平林孝裕 (2007) 「「関係としての自己」再考——『死に至る病』における自己の構成をめぐる」『神学研究』54号, pp.67-80.
- Hirakouji, Kenji (1973) "Jibun Forms in Japanese" *Journal of Japanese Linguistics*, Vol.2, De Gruyter, pp.17-43.
- 平野謙 (1972) 『純文学論争以後』筑摩書房.
- 廣瀬幸生 (2017) 「自分の言語学——言語使用の三層モデルに向けて」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編 (2017) 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』開拓社, pp.2-24.
- 廣瀬幸生・加賀信広 (1997) 『指示と照応と否定』研究社出版.
- 広津和郎 (1973) 『師崎行』『広津和郎全集 第1巻』中央公論社, pp.172-186.
- 久山康編 (1956) 『近代日本とキリスト教〔明治篇〕』創文社.
- 飛矢崎貴規 (2017) 「〈社会化した私〉と〈社会化された自我〉のあいだ——橋川文三による小林秀雄「私小説論」批判の論理」『文学研究論集』第47号, pp.189-209.
- 二葉亭四迷訳 (1955) 『あひゝき・片恋・奇遇 他一篇』岩波文庫.
- 井出里咲子 (2017) 「ことばの研究における自己観と社会思想——場の理論からの展望」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』開拓社, pp.179-197.
- 飯島宗亨 (1992) 『自己について』未知谷.
- 池田光義 (1988) 「G. ジンメルにおける個人主義思想の諸形態をめぐる——Individualität 概念を中心に」『一橋論叢』100巻1号, pp.117-136.
- 石川啄木 (1967) 『啄木全集 第4巻』筑摩書房.
- 伊藤整 (1972) 『伊藤整全集 1』新潮社.
- 鍵本優 (2006) 「大杉栄における「自己無化」言説——その特異性について」社会学研究会『ソシオロジ』第51巻2号, pp.109-125.
- 鍵本優 (2009) 「自己解体的な自己意識の社会学的な考察とその問題点——辻潤の言説を手がかりとして」社会学研究会『ソシオロジ』第53巻3号, pp.3-19.
- 鍵本優 (2015) 「「脱・自分」の社会学的考察への理論的予備作業——問題提起と社会学的アイデンティティ論・自己論の批判的検討」社会学研究会『ソシオロジ』第60巻2号, pp.39-56.
- 鍵本優 (2017) 『「近代的自我」の社会学——大杉栄・辻潤・正宗白鳥と大正期』インパクト出版会.
- 梶田叡一 (1998) 『意識としての自己——自己意識研究序説』金子書房.
- 柿本敏克 (2008) 「社会的アイデンティティ研究からみた自己の社会性」下斗米淳編『自己心理学6 社会心理学へのアプローチ』金子書房, pp.65-84.
- 片桐雅隆 (2011) 『自己の発見——社会学史のフロンティア』世界思想社.
- 片桐雅隆 (2017) 『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』ミネルヴァ書房.
- 河上徹太郎 (1969) 「花 花」『河上徹太郎全集 第1巻』勁草書房, pp.103-108.
- Kierkegaard, Søren (1929) *Sygdommen til Døden*, Søren Kierkegaard Samlede Værker, Anden Udgave, Bind 11, pp.131-272. (= 梶田啓三郎訳 (1996) 『死にいたる病』ちくま学芸文庫.)
- 木川行央 (2011) 「一人称代名詞としての「自分」」『言語科学研究』(17) 神田外語大学, pp.39-65.
- 木村敏 (1972) 『人と人との間——精神病理学的日本論』弘文堂.
- 木村敏 (2008) 『自分ということ』ちくま学芸文庫.
- 木下尚江 (1965) 『明治文学全集 45 木下尚江集』筑摩書房.
- 金晶 (2014) 「日中再帰代名詞の意味による研究」『歴史文化社会論講座紀要』11, pp.25-39.
- 北村透谷・勝本清一郎校訂 (1970) 『北村透谷選集』岩波文庫.
- 北山忍 (1998) 『自己と感情——文化心理学による問いかけ』共立出版.
- 小林秀雄 (2001a) 『小林秀雄全集 第2巻』新潮社.
- 小林秀雄 (2001b) 『小林秀雄全集 第3巻』新潮社.

- 小林秀雄 (2001c) 『小林秀雄全集 第4巻』新潮社.
- 小林紀晴 (2004) 『ASIAN JAPANESE 1——アジア・ジャパニーズ』新潮文庫.
- 小林敏明 (2010) 『〈主体〉のゆくえ——日本近代思想史への一視角』講談社選書メチエ.
- 小島憲之 (1995) 『国風暗黒時代の文学 下Ⅱ——弘仁・天長期の文学を中心として』塙書房.
- 小島憲之校注 (1964) 『日本古典文学大系 69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店.
- 河野哲也 (2006) 『〈心〉はからだの外にある——「エコロジカルな私」の哲学』NHK ブックス.
- 久米正雄 (2003) 「「私」小説と「心境」小説」千葉俊二・坪内祐三編『日本近代文学評論選【明治・大正篇】』岩波文庫, pp.346-361.
- 国木田独歩 (1939) 『運命』岩波文庫.
- Kuno Susumu (1972) "Pronominalization, Reflexivization, and Direct Discourse", *Linguistic Inquiry* Vol. III, The MIT Press, pp.161-195.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- Lawler, Steph (2014) *Identity: Sociological Perspectives*, 2nd edition, Polity.
- Locke, John (1965) *An Essay Concerning Human Understanding*, Everyman's Library, revised edition. (= 大概春彦訳 (1972-1977) 『人間知性論(1)~(4)』岩波文庫.)
- 牧野智和 (2012) 『自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.
- 正宗白鳥 (1983a) 『正宗白鳥全集第1巻』福武書店.
- 正宗白鳥 (1983b) 『正宗白鳥全集第20巻』福武書店.
- 正宗白鳥 (1985) 『正宗白鳥全集第21巻』福武書店.
- Mauss, Marcel (1968) *Sociologie et anthropologie*, 4^e édition, PUF. (= 有地亨・山口俊夫訳 (1977) 『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂.)
- McCready, Eric (2007) "The Dynamics of a Japanese Reflexive Pronoun", A. Sakurai, K. Hasida and K. Nitta (eds.) *New Frontiers in Artificial Intelligence 3609: JSAI 2003 and JSAI 2004 Conferences and Workshops, Revised Selected Papers*, Springer Verlag, pp.405-415.
- Mead, George Herbert (1934) *Mind, Self, Society, from the standpoint of a social behaviorist*, edited and with an introduction by Charles W. Morris, The University of Chicago Press. (= 河村望訳 (1995) 『精神・自我・社会』人間の科学社.)
- Merton, Robert King (1957) *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press. (= 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳 (1961) 『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- Merton, Robert King (1966) "Epilogue: Social Problems and Sociological Theory", Robert K. Merton and Robert A. Nisbet (eds.) *Contemporary Social Problems*, 2nd edition, Harcourt, Brace & World, Inc, pp.775-823. (= 森東吾・森好夫・金沢実訳 (1969) 「社会問題と社会学理論」『社会理論と機能分析』青木書店, pp.409-471.)
- 三井宏隆 (2000) 『レクチャー「社会心理学」Ⅳ セルフ・アイデンティティ・インタラクション』垣内出版.
- 宮本久雄 (1991) 『聖書と愛智——ケノーシス(無化)をめぐる』新世社.
- 宮本百合子 (1985) 「貧しき人々の群」『日本プロレタリア文学集・1 初期プロレタリア文学集(-)』新日本出版社, pp.337-402.
- 溝上慎一 (1999) 『自己の基礎理論——実証的心理学のパラダイム』金子書房.
- 森真一 (2000) 『自己コントロールの檻——感情マネジメント社会の現実』講談社選書メチエ.
- 森雄一 (2017) 「「自己表現」の日本語史・素描」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』開拓社, pp.198-216.
- 永澤済 (2010) 「複合語からみる「自分」の意味変化——なぜ「自分用事」「自分家」「自分髪」という言い方ができたか」『東京大学言語学論集』29, pp.195-220.

- 中間玲子 (2016) 「「自尊感情」概念の相対化」 中間玲子編『自尊感情の心理学——理解を深める「取り扱い説明書」』金子書房, pp.192-215.
- 中村光夫 (1954) 『日本の近代小説』岩波新書.
- 中村吉治 (1971) 『新訂 日本の村落共同体』日本評論社.
- 中村雄二郎・木村礎編 (1976) 『村落・報徳・地主制——日本近代の基底』東洋経済新報社.
- 夏目漱石 (1996) 『こころ 坊ちゃん』文春文庫.
- 根岸泰子 (1987) 「田山花袋「平面描写」再論——「印象描写」へ至る語り手の問題」『岐阜大学国語国文学』(18), pp.31-42.
- 新居格 (1975) 「無価値の狂想」大沢正道編『虚無思想研究 上』蝸牛社, pp.105-109.
- Noguchi, Tohru (2015) "Some Notes on the Historical Development of Japanese Reflexives", 『お茶の水女子大学人文科学研究』(11), pp.53-66.
- Noguchi, Tohru (2017) "Some Notes on Reflexivity in Japanese", 『お茶の水女子大学人文科学研究』(13), pp.121-134.
- 小葉哲哉 (2017) 「再帰用法の「自分」と述語の意味制約」言語文化共同研究プロジェクト『認知・機能言語学研究』(2), pp.1-10.
- 岡崎宏樹 (2020) 『バタイユからの社会学——至高性, 交流, 剥き出しの生』関西学院大学出版会.
- 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉訳 (2019) 『現代語訳 藤氏家伝』ちくま学芸文庫.
- 大沢正道編 (1975) 『虚無思想研究 下』蝸牛社.
- Oshima, David Y. (2004) "On Exceptional *Zibun* Binding: An Experimental Approach", Timothy Vance and Kimberly Jones (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, vol.14. Stanford: CSLI Publications, pp.283-294.
- Parsons, Talcott (1964) *Social Structure and Personality*, The Free Press of Glencoe. (= 武田良三監訳 (2011) 『新装 社会構造とパーソナリティ』新泉社.)
- 酒井潔 (2005) 『自我の哲学史』講談社現代新書.
- 坂田達紀 (2008) 「私批評の成立——小林秀雄の昭和 11 年頃の変化について」『四天王寺国際仏教大学紀要』, pp.465-481.
- 作田啓一 (1996) 『一語の辞典 個人』三省堂.
- Sartre, Jean-Paul (1943) *L'être et le néant*, Gallimard. (= 松浪信三郎訳 (2007) 『存在と無 I・II・III』ちくま学芸文庫.)
- 里見弴 (1951) 『善心悪心 他三篇』岩波文庫.
- 勢古浩爾 (2013) 『石原吉郎——寂滅の人』言視舎.
- Shneidman, Edwin S. (1993) *Suicide as Psychache: A Clinical Approach to Self-Destruction Behavior*, Rowan & Littlefield Publishers, Inc. (= 高橋祥友訳 (2005) 『シュナイドマンの自殺学——自己破壊行動に対する臨床的アプローチ』金剛出版.)
- 柴田健志 (2015) 「時間の総合における「無」の機能——サルトルの哲学と認知神経科学」鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集 81 巻, pp.19-28.
- Simmel, George (1917) *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft, Sammlung Göschen*, Walter de Gruyter. (= 清水幾太郎訳 (1979) 『社会学の根本問題』岩波文庫.)
- 下岡友加 (2016) 「志賀直哉の作家以前——自分小説の誕生」『国文学攷』228・229 号, 広島大学国語国文学会, pp.1-12.
- Smith, Adam (1790) *The Theory of Moral Sentiments*, the sixth edition, Printed for A. Strahan; and T. Cadell in the Strand; and W. Greuch, and J. Bell & Co. at Edinburgh. (= 高哲男訳 (2013) 『道徳感情論』講談社学術文庫.)
- 杵浦勝 (1993) 「自分」『日本語学』第 12 巻第 7 号, 明治書院, pp.34-38.
- 壽里茂 (1960) 「現代社会とアノミーの問題」『早稲田商学』144 号, pp.53-85.

- 橋純一編（1922）『橘守部全集 第9 俗語考 上』国書刊行会.
- 谷川恵一（2008）『歴史の文体 小説のすがた——明治期における言説の再編成』平凡社.
- 田山花袋（1968）『明治文学全集 67 田山花袋集』筑摩書房.
- 田山花袋（1995）『定本 花袋全集』第26巻, 臨川書店.
- 時岡良太（2018）『「自分」とは何か——日常語による心理臨床学的探求の試み』創元社.
- 友田英津子（2006）「日本語再帰代名詞「自分」の用法について」国際コミュニケーション学会『国際経営・文化研究』11（1）, pp.101-107.
- Tuan, Yi-Fu（1982）*Segmented Worlds and Self: Groupe Life and Individual Consciousness*, University of Minnesota Press.（＝阿部一訳（2018）『個人空間の誕生——食卓・家屋・劇場・世界』ちくま学芸文庫.）
- 坪内雄三編（2000）『明治の文学 第5巻 二葉亭四迷』筑摩書房.
- 鶴殿篤（2011）「日本の教育学説における人格概念の検討——ヘルバルト主義を中心に」『文京学院大学教職研究論集』第2号, pp.73-83.
- 上野千鶴子編（2001）『構築主義とは何か』勁草書房.
- 上野千鶴子編（2005）『脱アイデンティティ』勁草書房.
- 宇野浩二（1972）「「私小説」私見」『日本近代文学大系 58 近代評論集Ⅱ』角川書店, pp.420-421.
- 和田尚明（2008）「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明編『ことばのダイナミズム』くろしお出版, pp.277-294.
- 鷺田清一（1996）『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書.
- Weber, Max（1913）“Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie”, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*. J.C.B.Mohr, 1922, Tübingen, S.403-450.（＝林道義訳（1968）『理解社会学のカテゴリー』岩波文庫.）
- Woodward, Kathryn（ed.）（1997）*Identity and Difference*, the Open University, Sage.
- 山口直孝（2011）『「私」を語る小説の誕生——近松秋江・志賀直哉の出発期』翰林書房.
- 山口節郎（1982）『社会と意味——メタ社会学的アプローチ』勁草書房.
- 山本紀子（2006）『“消えたい”症候群——リストカットとオーバードーズ 生への処方箋を考える』教育資料出版会.
- 矢田部圭介（2012）「私としての私——本当の自分の扱い方」矢田部圭介・山下玲子編『アイデンティティと社会意識——私のなかの社会／社会のなかの私』北樹出版, pp.2-19.
- 矢崎嵯峨の舎（1970）「初恋」谷崎潤一郎ほか編『日本の文学 77 名作集（一）』中央公論社, pp.54-73.
- 吉田綾乃（2008）「日本文化における自己卑下提示の多面的機能」下斗米淳編『自己心理学 6 社会心理学へのアプローチ』金子書房, pp.46-47.

Examination of the Word and Concept of “*Jibun*”:

For Sociological Discussions of Notionally Dismantling Ownself

Yu KAGIMOTO

Abstract

Terms such as “self,” “personality,” “subject,” “identity,” “*Jiko*” and “*Jibun*” have different characteristics and limits, though their meanings are similar. *Jiko* and *jibun* are Japanese words which in general mean self. The purpose of this paper is to show a cognitive framework for classifying and organizing the objects of sociological discussions of notionally dismantling ownself by examining these terms and comparing them to *jibun*.

This paper finds that the Japanese word *jibun* and its concept have a complexity peculiar to the modern Japanese society, reflected especially when *jibun* is the object of notional dismantling. This introduces the new theoretical insight to sociology that the reflexivity of *jibun* can be multiple both in content and form. Therefore, a sociological discussion of the multiple forms of *jibun* as targets of reflexivity is expected.

Keywords: Sociology, Reflexivity, Modern Japan, Jibun, Self